

ピサのパウンド

——『ピサ詩篇』試論——

平野 順雄

Pound at Pisa: An Essay on *The Pisan Cantos* of Ezra Pound

Yorio HIRANO

エズラ・パウンド (Ezra Pound, 1885–1972) の『ピサ詩篇』 (*The Pisan Cantos*, LXXIV–LXXXIV) は、記憶の渦だ。先行する詩篇から流れ込む主題群や、パウンドの個人的記憶が『ピサ詩篇』を満たすばかりではない。一つの詩篇で記された収容所体験が、後続する詩篇では即座に想起の対象となる。先行する詩篇の記憶を再生するとともに、新たな記憶の生成と再生とを同時進行させつつ、テキストはうねりながら進行していく。こうした三種の記憶が、断片化され、思考の音符となって渦巻くのが『ピサ詩篇』の特徴だと思われる。しかし、『ピサ詩篇』最大の特徴は、渦の中心にいるパウンドが、滅んだ王ムッソリーニ亡き後の「大いなる魂の夜」(74/436) を、生き抜かねばならぬ書記パウンドだったことである。では、どのようにしてパウンドはこの課題を果たしたのか。そして、その意義は何であったのか。これを確かめるのが本稿の目的である。

I. 成立の事情

まず、ムッソリーニとパウンドの年譜を見ておこう¹⁾。

1943年

7月19日連合軍のローマ爆撃によりムッソリーニの失脚は決定的になる。

7月24, 25日のファシズム大評議会は政府の解散を可決。国王ヴィットーレ=エマヌエーレ三世は、ムッソリーニに首相の座をバドリオ元帥に明け渡すよう告げ、ムッソリーニを逮捕させる。新政府は直ちに連合国との和平交渉に入った。ムッソリーニ退陣の翌日、ワシントン地裁は、パウンドがローマからアメリカに向けて行ったローマ放送に対してパウンドを反逆罪で起訴。パウンドは一時、チロル地方に逃れた後、ラパロに戻る。

1945年

4月27日ムッソリーニ、ファシスト党首脳とともにパルチザンに捕まる。

4月28日ムッソリーニ、愛人クラレッタとともに別荘ヴィラ・ベルモンテの石壁を背に処刑される。二人の遺体はドンゴ村役場前で処刑された党首脳らの遺体とともにミ

ラノに運ばれ、前年夏にパルチザンが処刑されたロレート広場で逆さ吊りにされた。5月3日パウンドはパルチザンに逮捕され、ジェノアの米軍諜報部で数週間取り調べを受ける。

5月24日ピサの米軍軍規律訓練所（the American Disciplinary Training Center at Pisa：以下DTCと略記する）の金網ばりの檻に入れられる。野天のため熱暑と風雨に晒され、夜はサーチライトの光にまともに照らされる。心身衰弱のため3週間後、医療区のテントに移された。9月から日中メモをとり『ピサ詩篇』を書き始める。己を「すでに日が沈んだ者」と呼ぶ。10月5日から11月5日まで、孔子の『大学』と『中庸』の英訳をする。

11月16日ピサからローマへ護送され、ワシントン空港へ向かう。18日ワシントンに到着すると直ちに牢獄へ連れて行かれた。反逆罪の告発を受けるが、精神異常で裁判に立てないと判断される。

12月21日ワシントン郊外の聖エリザベス病院に収容される。以後、1958年に釈放されるまでの13年近くをここで過ごすことになる。

1948年

『ピサ詩篇』刊行。

年譜から分かるように『ピサ詩篇』は、米軍軍規律訓練所で書かれた。ゴリラの檻とパウンドが呼ぶ、雨風と熱とサーチライトの光に晒され眠ることもままならない「死の独房」での3週間をへた後にある。手元にあったのはパルチザンに捕まった時、とっさにポケットに入れたレッグ訳の孔子と中国語辞書そして後にトイレで見つけた廉価版のポケット詩集だけであった。したがって『ピサ詩篇』は、他の詩篇とは違って、何か本を参照して書かれたのではなく、ほとんどすべての行が記憶とDTC体験によって書かれているのである。

だから、先行する『キャントーズ』の詩句が、『ピサ詩篇』に流れ込んでいるのは不思議ではない。その流入のあり方を見ておこう。

II. 記憶の渦

記憶がどのように渦を巻いているのかを、糊澤厚生「*The Cantos* の Internal Quotation²⁾」に基づいて、確認しておく。詩句の流入状況を以下の三種に分類し、コメントを加えていくことにする。

- I. 先行する『詩篇』から『ピサ詩篇』に流れ込む詩句
 - II. 『ピサ詩篇』第一歌「詩篇第74篇」から後続する『ピサ詩篇』に流れ込む詩句
 - III. 『ピサ詩篇』第二歌「詩篇第75篇」以後の「詩篇」から後続する『ピサ詩篇』、『鑿岩機詩篇』、『玉座詩篇』、『草稿と断片』に流れ込む詩句
- I. 先行する『詩篇』から『ピサ詩篇』に流れ込む詩句（頁は *Cantos* LXXII, LXXIII が入る前の1975年 Faber 版 *The Cantos of Ezra Pound* による：1973年の *New Direction* 版も頁は同一である）

- Canto 1/4 “*A man of no fortune, and with a name to come.* エルベノールを指す
74/439 of no fortune and with a name to come パウンド=オデッセウス=エルベノール
を指す
- 74/446 “and with a name to come”**
εσομένοισι [for the generation to come, *Od.* XI. 76]
80/513 (no fortune and with a name to come)
80/514 men of no fortune and with a name to come
- Canto 4/16 And we sit here... / there in the arena... 歴史を俯瞰するパウンド
74/481 So we sat there by the arena, パウンド, エリオット, D.M.G.アダムズ
- Canto 11/50 OLIM *de Malatestis*. [once of Malatesta] 理想的英雄マラテスタ
Canto 76/462 the bas relief of Ixotta / And the care in contriving /
Olim de Malatestis / the long hall over the arches at Fano /
Olim de Malatestis
Canto 80/501 in Fano Caesaris for the long room over the arches / olim
de Malatestis
Canto 83/529 Olim de Malatestis
Canto 24/112 (That, I assure you, happened. / Ego, scriptor cantilenae.) 私, キヤントーの
書き手 [下線は平野]
76/458 As a lone ant from a broken ant-hill / from the wreckage of Europe,
ego scriptor
- Canto 25/117 “as the sculptor sees the form in the air / before he sets hand to mallet,
25/119 “as the sculptor sees the form in the air... / “as glass seen under water,
**74/430 stone knowing the form which the carver imparts it / the stone knows
the form**
- Canto 27/131 And that tovarisch cursed and blessed without aim 同志
**74/430 and tovarish blessed without aim / wept in the rainditch at evening /
Sunt lumina**
- Canto 30/147 Time is the evil. Evil.
74/444 Time is not, Time is the evil, beloved
Beloved the hours βροδοδάκτυλος [rosy-fingered]
- Canto 31/153 Tempus loquendi, / Tempus tacendi 語る時と黙す時
74/429 Tempus tacendi, tempus loquendi
- Canto 36/177 Where memory lives 記憶が生きているところ
76/452 dove sta memoria
76/457 dove sta memoria
36/178 that formed trace in his mind 心に残る痕跡
74/446 and that certain images be formed in the mind to remain there
76/457 that have carved the trace in the mind
36/179 And they went looking for Manicheans
So they dug for, and damned Scotus Eriugena

実はエリゲナでなくその弟子 Amalric の遺体が掘り起こされて焼かれた。[下線は平野]

74/429 and they dug him up out of sepulture

80/528 and they dug up his bones in the time of De Montfort

36/180 Sacrum, sacrum, inluminatio coitu 聖なる性交

74/435 in coitu inluminatio

Canto 38/189 The white man who made the tempest in Baluba フロベニウスがアフリカの部族に威嚇された時、雷雨に

Der in Baluba Das Gewitter gemacht hat になった。部族の者は白人が雷雨を起こしたと思ひ込んだ。

74/436 Frobenius der Geheimrat / der im Baluba das Gewitter gemacht hat

77/465 der im Baluba

Canto 39/193 *κακὰ φάρμακ' ἔδωκεν* *kaka pharmak edōken* [She gave them evil drugs, *Od. X*, 213] キルケーの悪しき薬

74/437 κακὰ φάρμακ' ἔδωκεν

39/194 nec ivi in harum / Nec in harum ingressus sum 豚小屋へ

[Nor went I to the pigsty / Nor into the pigsty did I enter, *Od. X*, 255–260]

エウリロコスはこの部下たちと違ってキルケーの館へ入らなかったの、皆の様子をオデュッセウスに報告できた。ここの「私」はエウリロコス。

74/436 ac ego in harum // ivi in harum ego ac vidi cadavers animae

[and I too in the pigsty // I went into the pigsty and saw soul-corpses]

74/439 in harum ac ego ivi

Canto 40/199 HANNO / that he ply beyond pillars of Herakles ハンノの沿岸航海

74/425 “the great periplum brings in the stars to our shore.” / You who have passed the pillars and outward from Herakles

Canto 43/219 Grass nowhere out of place. 草を称える

74/435 grass nowhere out of place

Canto 45/229 with usura / hath no man a painted paradise on his church wall 高利対芸術美

74/436 I don't know how humanity stands it / with a painted paradise at the end of it / without a painted paradise at the end of it

45/230 cut stone signed 芸術美

74/448 being preferable / and by analogy the form of San Zeno the / columns signed by their maker

78/480 So he said, looking at the signed columns in San Zeno

“how the hell can we get any architecture

when we order our columns by the gross?

Canto 46/233 Hath benefit of interest on all / the moneys which it, the bank, creates out of nothing. 無から金を生み出す銀行

74/440 or lending / that which is made out of nothing

76/462 ex nihil

77/468 interest on all it creates out of nothing / the buggering bank has;

pure iniquity / and to change the value of money

Canto 47/236 Who even dead, yet hath his mind entire! ティレシアースのこと

80/494 Nothing but death, said Turgenev (Tiresias) / is irreparable / ἀγλαός ἀλάων πόρνη

Περσεφόνηα* / Still hath his mind entire

[*パウンドは、『オデュッセイア』第10書490–495で“Bright Persephone has granted reason to the blind man”を表すギリシャ語原文を思い出そうとしている]

Canto 48/240 thus initiating the coffee-house facts of Vienna ウイーンのコーヒー店の起源

74/448 thus the coffee-house facts of Vienna

Canto 50/248 ‘Leave the Duke, Go for gold!’ 銀行が政治を動かす例

79/486 “Leave the Duke, go for the gold”

80/497 Leave the Duke, go for the gold!

Canto 53/273 μεταθεμένων τε τῶν χρωμένων [of change of moneys] 貨幣

74/440 METAHEMENON TE TON / KRUMENON

76/463 METAΘEMENON

77/468 METATHEMENON

78/481 the root stench being usura and METAHEMENON

Canto 54/275 some cook, some do not cook / some things can not be changed. 人の性格は変わらないこと

81/518 “Some cook, some do not cook / some things cannot be altered”

Canto 69/407 To T. Jefferson:

貴族政治を恐れる J. アダムズが君主政治を

‘You fear the one, I the few.’

恐れるジェファソンに言った言葉

81/518 “You the one, I the few”

太字で示した「詩篇第74篇」には、酔ってキルケーの館の屋根から落ち、首の骨を折って死んだため不名誉な名を残すことになったエルペノールへの言及からはじまって、「彫刻家が石に鑿を振るう以前に石がその形を知っている」という芸術の奥義を示すフレーズや、「語るに時あり、黙すに時あり」という『伝道の書』(Ecclesiastics)からの「語る」と「黙す」の順序を逆にした引用（「黙す」が「語る」の前に来ていることに注意）、「心の中に形作られたイメージがそこにとどまる」といった特権的記憶に関する文をへて、『オデュッセイア』ではキルケーの館に入って豚に変えられたりしないはずのオデュッセウスも豚小屋に入ってしまう、いまや豚の一頭になっているらしいという変奏など、実に多くのフレーズが流れ込んでいることが分かる。無論、パウンドが常に主張していた芸術美と高利(USURA)との対立、貨幣価値を変えて利殖を図ることへの痛罵もここに姿をあらわしている。また芸術の保護者でミニにテンピオを建てた15世紀イタリアの理想的英雄ジスムンド・マラテスタや新たな国家建設に尽力したアメリカ第2代大統領ジョン・アダムズといったパウンドの英雄たち、死した後も全き心を持っていたティレシアース、ドイツの考古学者・人類学者で「知への欲求」を伝えるフロベニウス、探検隊を率いて「沿岸航海」を行いジブラルタル海峡を越え、モロッコに七つの町を建設したカルタゴの將軍ハンノーなどの理想的人物が、想起され「詩篇第74篇」に再度登場している。

したがって、「詩篇第74番」に流れ込む詩句は、DTCに捕らわれたパウンドが、自らを

定位するための準拠枠になっていると考えられる。ただし、理想的英雄の側に立って書かれてきた先行する詩篇とはちがって、「詩篇第74篇」のパウンドは不名誉な名を残すことになったエルペノールや、キルケーの豚小屋に入るまぬけなオデュッセウスの側に立って書いている。否、パウンドはエルペノールやまぬけなオデュッセウスその人になっているのだ。

少々先走るが、「私、キャントーの書き手」(Ego, scriptor cantilenae)なる詩句は、「詩篇第24篇」では「ここが世界の中心である」(hic est medium mundi)に続く堂々とした宣言であったのに対して、「詩篇第76篇」では「ヨーロッパの廃墟から、壊れた蟻塚から這い出た孤独な私、書き手」(As a lone ant from a broken ant-hill / from the wreckage of Europe, ego scriptor)という打ちひしがれた力ないつぶやきに下落している。この落差は、『ピサ詩篇』の書き手が置かれた状況を如実に物語るであろう。高みから奈落へ書き手は失墜しているのである。

次に、こうして先行する「詩篇」の記憶を再生した「詩篇第74篇」が、後続する「詩篇」の記憶を生成する様子を見ておこう。

II. 「詩篇第74篇」から後続する「詩篇」に流れ込む詩句(番号の次の数字は頁を表す。本論考中、訳は断りがなき限り新倉俊一訳『エズラ・パウンド詩集』³⁾を使用する)

(1) 425 **Thus Ben and Clara a Milano / by the heels at Milano** ムッソリーニ

78/482 but was hang'd dead by the heels before his thought in porposito
came into action efficiently

(2) 425, 426, 430 **Oÿ TIS, Oÿ TIS** ノー・マン, ノー・マン ノー・マンの主題

Canto 80/499 Oÿ TIS

Canto 85/554 Odysseus "to no man"

Canto 89/594 OU TIS

(3) 425 **a precise definition** 正確な定義

Canto 77/468 "only the total sincerity, the precise definition"

Canto 77/469 "Just like Jack Dempsey's mitts" sang Mr Wilson / so that you cd /

crack a flea on eider wan / ov her breasts / sd / the old Dublin pilot /

or the precise definition / bel seno (in rimas escarsas, vide sopra)

「ジャック・デンプシーのグラブくらいさ」とウィルソンが唄った /

あの娘の胸ならどっちでも / 蚤くらいはつぶせるぜ / と言ったのはダブ

リンの水先案内人 / 正確な定義 / 美しい乳房 (たぐい稀なる韻、

バル・セノー イン・リマス・エスカルサス
ウイヂ・ソブラ
上を見よ) (平野訳) ["My girl's got great big tits" が "Just like Jack

Dempsey's mitts" の前になければ韻は踏めないはず]

Canto 99/711 Precise terminology is the first implement

Canto 104/743 No science without clear definitions

(4) 426, 435 **"of sapphire, for this stone giveth sleep"** 石があたえる眠り

Canto 76/435 for this stone giveth sleep

(5) 426-427 **"I am noman, my name is noman" / but Wanjina is, shall we way, Ouan Jin /**

**or the man with an education / and whose mouth was removed by his father /
because he made too many things** 口をなくしたワンジナ

「アイ・アム・ノー・マン、俺の名はノー・マンだ」/雨の神ワンジナは「ワンジン」に通じる/
つまり教育のあるひとだ/あまり多くのものを創ったかどで 彼は/父親に口を奪い取られた
Canto 77/474 for Wanjina has lost his mouth

- (6) **427 as Fujiyama at Gardone / when the cat walked the top bar of the railing / and the
water was still on the West side / flowing toward the Villa Catullo / where with
sound ever moving / in diminutive poluphloisbois / in the stillness outlasting all
wars / “La Donna” said Nicoletti / “la donna, / la donna!”** ガルダ湖畔の町ガルドネ
Canto 76/458 said the Prefetto / as the cat walked the porch rail at Gardone /
the lake flowing away from that side / was still as is never in Sirmio /
with Fujiyama above it: “La donna...” / said the Prefect, in the silence
Canto 78/478 and the water flowing away from that side of the lake / is silent
as never at Sirmio / under the arches / Foresteria, Salò, Gardone /
to dream the Republic.

- (7) **429 “sunt lumina” said Eigina Scotus** ネオプラトニズムの「光」
429 “sunt lumina” said the Oirishman to King Carolus, カルル皇帝に向かって堂々と
“OMNIA, 「セント・ルミナ——
all things that are are lights” オムニア」とスコトウスは言った
(すべては光である)

430 Sunt lumina
Canto 83/528 omnia, quae sunt, lumina sunt,
Canto 87/571 Y Yin, Ocellus, Erigena:
“All things are lights.”

- (8) **429 and the fleet at Salamis made with money lent by the state to the / shipwrights**
国家の金による船の建造
431 nevertheless the state can lend money / and the fleet that went out to
Salamis / was built by state loan to the builders
440 and the state *can* lend money as was done / by Athens for the building of
the Salamis fleet
Canto 77/468 it is recorded, and the state *can* lend money / as proved at Salamis
Canto 79/486 and the Fleet that triumphed at Salamis

- (9) **430 Hey Snag wots in the bibl’? / wot are the books ov the bible? / Name’em,
don’t bullshit ME.** 四人の会話
「おい、スナッグ聖書には、一体なんてある/聖書の巻をぜんぶ言ってみろ/
おれにウソをこくなよ」
Canto 76/454 f. Criminals have no intellectual interests?
“Hey, Snag, wot are the books ov th’ bibl’”
“name ’em, etc.
“Latin? I studied latin.”

said the nigger murderer to his cage-mate

犯罪者たちは知的な興味が欠けているって？

「おい、スナッグ、聖書の巻を / ぜんぶ言ってみろ」云々 / 「ラテン語だって？

おれもラテン語はやったぞ」 / 黒人の殺人犯が同房の仲間にそう言っていた

Canto 77/473 “St. Louis Till” as Green called him. Latin ! 囚人の会話

“I studied latin” said perhaps his smaller companion.

“Hey Snag, what’s in the bibl’ ?

what are the books of the bibl’ ?

Name ’em! don’t bullshit me!”

(10) 430 4 times was the city rebuilt, Hooo Fasa / Gassir, Hooo Fasa dell’ Italia tradita / now in the mind indestructible, Gassir, Hoooo Fasa, / With the four giants at the four corners / and four gates mid-wall Hooo Fasa ワガドゥ神話

四たび都市は再建された、ファーサ万歳！ / ガシールよ、裏切られたイタリヤの

ファーサ万歳！ / いまや心のなかで滅びることはない、ガシールよ、ファーサ

万歳！ / 四隅には四人の巨人 / 内壁には四つの門、ファーサ万歳！

442 “I believe in the resurrection of Italy quia impossibile est [because it is impossible]

4 times to the song of Gassir

ワガドゥ神話

now in the mind indestructible

Canto 77/465 hooo / der im Baluba // Faasa ! 4 times was the city remade, /

now in the heart indestructible / 4 gates, the 4 towers

(11) 433 ‘PEI ΠANTA パンタ・レイ (万物は流転する)

Canto 80/512 under Abélar’s bridges πάντα ρεῖ

Canto 83/529 or πάντα ρει

Canto 96/658 PANTA ‘REI

Canto 107/762 ρεῖ, the flowing

(12) 433 the cake shops in the Nevsky, and Schöners / not to mention der Greif at

Bolsano la patronne getting older / Mouquin’s or Robert’s 40 years after 昔の店の名

Canto 76/453 not even a wall, or Mouquin, or Voisin or the cake shops / in

The Nevsky // The Greif, yes, I suppose, and Schöners and perhaps /

the Taverna and Robert’s

Canto 78/480 with the cakeshops in the Nevsky

(13) 433 où sont les heures of that year 去年の時間はいまいずこ

Canto 79/484 Où sont?

(14) 434 niggers scaling the obstacle fence 黒人たちが障害柵に登る

Canto 77/473 —niggers comin’ over the obstacle fence

as in the insets at the Schifanoja

(del Cossa) to scale, 10,000 gibbet-ifrom posts supporting

barbed wire

Canto 77/475 men move to scale as in Del Cossa’s insets

at Schifanoja under the Ram and Bull

Canto 78/477 and those negroes by the clothes-line are extraordinary like the
figures del Cossa

Their green does not swear at the landscape
2 months' life in 4 colours

Canto 79/484 dirt pile as per the Del Cossa inset

(15) 434 and Mr Edwards superb green and brown / in ward No 4 a jacent

**benignity, / of the Baluba mask: “doan you tell no one / I made you
that table” / methenamine eases the urine / and the greatest is charity /**

to be found among those who have not observed / regulations 囚人の慈悲
四号棟に住む心のやさしい / すばらしい緑褐色のエドワーズは / パルーバ族の顔付
きをしている 「だれにも言うなよ / おれが机を作ってやったのを」 / メセナミンは
排尿を楽にする / 規則を破ったこの人たちにみられる / 愛のわざこそ最も価値がある

Canto 79/485 “doan’ tell no one I made you that table”

Canto 81/518 f thank Benin for this table ex packing box

“doan yu tell no one I made it”

from a mask fine as any in Frankfurt

“It’ll get you offn th’ groun”

**(16) 434 and yet petty larceny / in a regime based on grand larceny / might rank as
conformity** けちな窃盗は大規模な窃盗に比べれば、罪ともいえぬ

Canto 76/457 and if theft be the main principle in government / (every bank
of discount J. Adams remarked) / there will be larceny on a minor
pattern

**(17) 434 “in meteyard in weight or in measure” / XIX Leviticus or / First
Thessalonians 4, 11** 正確に計ること

440 and there is also the XIXth Leviticus

Canto 76/454 and there is no need for the Xtns to pretend that / they
wrote Leviticus / chapter XIX in particular

(18) 435 each one in his god’s name 各々が神の名のもとに

Canto 76/454 each one in the name of his god

Canto 78/479 “each one in the name”

Canto 79/487 “each one in the name of its god”

Canto 84/540 Each in the name of...

(19) 436 and the guards op / of the... / was lower than that of the prisoners 囚人が看守に勝る

Canto 80/514 the guard’s opinion is lower than that of the / prisoners

(20) 436 “c’mon small fry” sd / the little coon to the big black; 囚人の会話

「さあ来い、チビ助」小柄な方がでかい方の黒人に向かって言った

Canto 76/455 “c’mon, small fry,” sd / the smaller black lad / to the larger.

(21) 437 sd / old Upward: / “not the priest but the victim” / his seal Sitalkas, sd / the

old combattant: “victim, / withstood them by Thames and by Niger with pistol

by Niger / with a printing press by the Thomas bank” / until I end my song / and

shot himself; 自殺した宗教学者アレン・アップワード

Canto 78/479 Sitalkas, double Sitalkas / “not the priest but the victim” / said
Allen Upward

Canto 107/763 Alan Upward’s seal showed Sitalkas.

(22) 438 Cunizza / e l'altra: “Io son’ la Luna” 「私は月よ」

443 Eurus, Apeliota as the winds veer in periplum / “Io son la luna”

Canto 76/453 la scalza [the barefoot girl]: Io son’ la luna

Canto 80/500 “... Io son’ la luna.”

(23) 438 Le Paradis n’est pas artificiel / but spezzato [broken] apparently / it exists
only in fragments unexpected excellent sausage, / the smell of mint, for

example, / Ladro the night cat; 天国は人工の物ではない。

天国は決して人工のものではない / だが見かけは壊れている / ぼらぼらにしか

天国は存在しない / 思いがけない上等のソーセージとか / 薄荷の匂い, あるい
は / 夜あそびの猫のラドロとか。

Canto 76/460 Le Paradis n’est pas artificiel / States of mind are inexplicable
to us.

/460 Le Paradis n’est pas artificiel,

l’enfer non plus. [hell isn’t either]

Canto 77/468 METATHMENON / we are not out of *that* chapter / Le Paradis n’est

pas artificiel / *Κόθηρα, Κόθηρα*, / Moving *ὄπὸ χθονὸς* enters the hall

of the records / the forms of men rose out of *γέα* / Le Paradis n’est

pas artificiel

(24) 442 Says the Japanese sentry : Paaak yu djeep over there, 日本兵の言葉

Canto 79/486 “paak you djeep oveh there”

/487 “paak you djeep oveh there.”

(25) 444 “beauty is difficult” sd / Mr Beardsley 「美は難しい」

and sd / Mr Kettlewell looking up from a

pseudo-Beardsley of his freshman composition

and speaking to W. Lawrence:

Pity you didn’t finish the job

while you were at it”

W.L. having run into the future non-sovereign Edvardus

on a bicycle equally freshman

a.d. 1910 or about that

beauty is difficult

「美は難しい」とピアズレーは言った / そして、ケトルウェルは / ピアズレーを真似て

描いている新入生向け課題から / 顔を上げ W. ロレンスに言ったものだ / 取り掛かっ

たのに / 片づかなかったとは お気の毒さま / ロレンス君は、やはり

新入生だった頃の / 未来の偉くないエドワード 3 世に自転車でぶつかったのだ /

1910年かそのころ / 美は難しい (平野訳)

in the days of the Berlin to Bagdad project
and of Tom L's photos of rock temples in Arabia Petra
but he wd / not talk of
LL.G. and the frogbassador, he wanted to
talk modern art (T.L.did)
but of second rate, not the first rate
beauty is difficult

445 beauty is difficult

446 Beauty is difficult.....the plain ground / precedes the colours

Canto 80/511 La beauté, "Beauty is difficult, Yeats" said Aubrey Beardsley / when Yeats
asked why he drew horrors / or at least not Burne-Jones / and Beardsley knew he
was dying and had to / make his hit quickly // hence no more B-J in his product.
// So very difficult, Yeats, beauty so difficult.

(26) 446 **aram vult nemus** [the grove needs an altar] 森には祭壇が要る

Canto 78/481 Aram vult nemus / as under the rain altars

Canto 79/492 *Kóθηρα* / aram / nemus / vult

Canto 90/607 Grove hath its altar / under elms, in that temple, in silence

(27) 446 **Arachne mi porta fortuna** アラクネが私に幸運を運ぶ

Canto 76/461 Arachne, che mi porta fortuna, go spin on that tent rope

461 Arachne che mi porta fortuna; / Athene, who wrongs thee?

(28) 449 **Hast 'ou seen the rose in the steel dust / (or swansdown ever?) / so light**

is the urging, so ordered the dark petals of iron 鉄粉のバラ

Canto 80/514 This wind is lighter than swansdown

(29) 449 **we who have passed over Lethe** レテ河を渡りし者

Canto 77/472 we who have passed over Lethe

「詩篇第74篇」のほとんど全てのページが、後続する詩篇のソースとなっていると言っ
てよいほどである。つまり、「詩篇第74篇」は、先行する詩篇の記憶を再生すると同時に
新たな記憶を生成しているのだ。テキストはまさしく記憶の渦となっている。「詩篇第74
篇」の渦の構成要素を見ておこう。

1番でムッソリーニ処刑を憤った後の2番と5番は、ノー・マンと化したオデュッセウ
ス＝パウンドが、ローマ放送で喋りすぎたために捕らわれている自らを、喋りすぎたため
口を奪われたワンジンに見立てていることを示すだろう。しかし、DTCに囚われの身と
なった今もパウンドは、ムッソリーニが夢見た理想国家イタリア建設が間違っていたとは
思っていない。事態の奥底に働く原理を見透すパウンドの眼は、皮肉なことに歴史の現
実には盲目なのである⁴⁾。10番は、ムッソリーニの「イタリア」と心の都市ワガドゥがパ
ウンドの眼には重なって映っていることを示している。ワガドゥとは、西アフリカのソニ
ンケ族に伝わる伝説の都市で、人間の虚栄、虚偽、貪欲、不和によって四度人の目から姿
を消し、ディエラ、アガダ、ガンナ、シラという名で四度再建された心の都市である。こ
の都市がいまや「心の中で滅びることはない」とされ、不滅の都市建設に向かう精神がじつ

くりと肯定されているのである。だから、『ピサ詩篇』を読んだ者には忘れがたい「天国は人工のものではない」（ボードレール『人工楽園』からの転用）、「美は難しい」という何度も繰り返される特権的なフレーズ（23番と25番）は、「パンタ・レイ（万物は流れる）」（11番）とあいまって、この地獄の状態にいる者を、美と光にみちた地上天国建設へ向けて突き動かす掛け声になるに違いない。

なぜなら、12番、13番、21番のように第二次大戦前の日々を懐かしむ ubi sunt（去年の雪は今いずこ）の主題だけではなく、理想国家建設の要となる理念であり芸術の要諦でもある「正確な定義」（3番）や、正しい取引の基礎となる「物の正しい計量」（17番）、そして銀行を太らせるのではなく国家の金によって必要な船を建造する「正しい金の使い方」（8番）などの主題が「詩篇第74篇」で生み出されているばかりか、神との正しいかかわり方も「各々が神の名のもとに」（18番）や、「森には祭壇がある」（26番）によって示されているからだ。これらの理念がパウンドにとって諸悪の根源である USURA（高利）と正確に対立するものであることは言うまでもない⁵⁾。

だが、圧倒的な肉体的苦痛を理想と理念だけで無化することはできないだろう。屋根のない金網ばりの独房で昼は夏の太陽に照り付けられ、夜はサーチライトの光をまともに浴びせられて眠ることもままならない囚人パウンドが、「石の与える眠り」（4番）を渴望し、ムッソリーニがサロ政府を建てた美しいガルダ湖畔の静謐を脳裏に浮かべて（6番）苦痛に耐えようとしたとしても無理はない。また、惨憺たる流血を幾度も目にしながら、死んだ兄弟の奴隷を解放した慈悲深い13世紀イタリアの貴婦人クニツァ・ダ・ロマーノを天上の月に見立てて（22番）、パウンドが自らの救いを求めたとしてもやはり無理はないだろう。さらに、パウンドがテントのロープの上で糸をつむぐ蜘蛛を、多産を誇ってアテネ女神の怒りを買った蜘蛛に変えられたアラクネに見立てて（27番）、あたかも口を奪われたワンジナのごとき自らに言葉をつむぐ力を回復させるよう祈っているように見えても不思議はない。これらの詩句は、パウンドのおかれた肉体的精神的苦境から脱するための祈りに他ならないからだ。

とはいえ、苦痛に満ちていそうな『ピサ詩篇』には余裕がある。「天国」の定義にも「上等のソーセージ」や「夜あそびの猫」を出してくる余裕があるばかりか（23番）、既に述べた「美は難しい」のところでもジョークが入っている（25番）⁶⁾。「未来の偉くないエドワード3世」など自転車でひき殺してやればよかった、という黒いジョークがそこにある。DTC で聞こえる黒人の囚人仲間の声もユーモラスだ（9番、15番、20番）。そしてそのユーモアは、犯罪者たちからこそ教養と勇氣と慈愛があるという転倒と無縁ではないのである。「けちな窃盗は大規模な窃盗に比べれば、罪ともいえぬ」（16番）や教養や品格において「囚人の方が看守に勝る」（19番）は、国家が銀行と結託して行う大規模な犯罪（USURA）を告発するとともに、ピサに捕らわれている重罪犯の方を正しき人々と見なそうとする詩句に他ならない。ピサでは価値の転倒が起こるのである。とりわけ、パウンドに机を与えてくれた黒人兵エドワーズの慈悲ばかりか顔付きや皮膚の色まで称えられるのは（15番）⁷⁾、口を奪われたパウンドが何よりも書くことによって生き延びようとしているからだ。前述したアラクネへの祈りと繋がる書くことの主題は、ピサでパウンドが「語る人」から「書く人」へ、それも為政者の側からでなく、虐げられた者たちの側から書く主体へ転換していることを示すのである⁸⁾。

14番を見られたい。障害柵を登る黒人たちの姿は、あたかも収容所からの脱出を表すように見えはしないだろうか。命令に従って強制労働をしているにすぎない彼らの姿は、幾度も繰り返されることによって意味の定めがたい夢のような画像に変わり、障害柵を乗り越えて外へ出る契機を孕んでくるように見える。そしてこの画像が、15世紀イタリアの画家フランチェスコ・デル・コッサがフェラーラのスキファノーヤ宮殿に描いたフレスコ画「三月」と結び付けられる時⁹⁾、パウンドの頭の中で、眼前のピサの風景は芸術作品の風景に変じているのである。ここに暗示されているのは、精神的救いが芸術の中からやってくるという一事ではなからうか。

ピサの収容所はパウンドを肉体的精神的に追いつめ、叩き潰しながら、パウンドを救いもするのである。DTCは、パウンドがどんな理念にも支えられない生の言葉や事物と初めて出会い、その豊饒を知っていく、再生空間として機能するらしいのだ。ジョークはその過程の遊びを伝えるものであるのかもしれない。囚人たちの会話を記述するパウンドは、生の言葉と出会っていることを寿ぐ書き手に変貌しているかのように見えるのだ。

だから『ピサ詩篇』のパウンドは、一生大事にした「正確な定義」さえ、書いた本人しか分からないジョークにするほど余裕がある(3番)¹⁰⁾。はやり歌の「ジャック・デンプシーのグラブくらいさ (mitts)」は「おれのあの娘はでっかいおっぱい (tits)」という一行が前になければ韻は踏めないはずだ¹¹⁾。

あらゆるものに神の光が宿るとするネオプラトニスト、スコトス・エリゲナの確信(7番)や磁石の力場にはいと鉄粉さえバラの形になるという詩句(28番)、そしてパウンドとその仲間が一度死を経たものであることを示す「われらレテ河を渡りし者」(29番)は、ゼロ人間と化したパウンド＝オデュッセウス＝エルペノールが、地獄くだりをしながら、地獄のただなかでさえ素晴らしいものを生み出せるという力強い宣言に他ならない。ピサの収容所は、パウンドに新たな主体を形成させる試練の場なのだ。『ピサ詩篇』中に音符のように散りばめられる「道」や「沿岸航海」という語は、次のことを暗示するように私には思える。すなわち、『ピサ詩篇』とは、パウンドが新たな主体を形成する「道」そのものであり、「沿岸航海」とは揺れに揺れるその航路なのである、と。

だが、われわれは結論を急ぐよりも、パウンドの試練をまずは詳細に辿らなければならない。

Ⅲ. 『ピサ詩篇』「詩篇第75篇」以後の「詩篇」から後続する『ピサ詩篇』および『鑿岩機詩篇』『玉座詩篇』『草稿と断片』に流れ込む詩句を見ておこう。(『ピサ詩篇』内でソースとなるフレーズを太字で示した)

Canto 76/457 **nothing matters but the quality / of the affection** Canto 77/466 愛の質

/460 J'ai eu pitié des autres / probablement pas assez, [I had pity for others / probably not enough] Canto 93/628 憐れみ

/461 **“Non combaattere” said Giovanna, / meaning: “don't work so hard**
あまり精を出すな Canto 83/531

/462 **things have ends and beginnings** Canto 77/465 始めと終わり

Canto 77/465 および473 **“How is it far, if you think of it?”** Canto 79/488 遠さ

- /467 および 468 **as the two halves of a seal, or a tally stick?** Canto 82/526 一對の符節
- /467 *directio voluntatis, ...* 志 Canto 87/572, 576
- /473 **Roma profugens Sabinorum in terras** Canto 78/478 安全な地へ逃れる
- /473 “Sligo in heaven” murmured uncle William / when the mist finally
settled down on Tigullio Canto 114/793 天国のようなスライゴ
- /475 **Sorella, mia sorella, / che ballava sobr’ un zecchin’** Canto 78/477 踊る妹
Canto 78/477 Napoleon with a goodth man, it took uth / 20 yearth to crwuth him / **it will
not take uth 20 years to crwuth Mussolini”** ムッソリーニを十字架にかける噂
Canto 80/497
- /479 Antonius / (“law rules the sea” meaning *lex Rhodi*) 海の法
Canto 87/570, Canto 89/601, Canto 94/639
- /480 nothing worse than fixed charge / ... / Mencius III, 1. T’ang Wan Kung /
Chapter 3 and verse 7 Canto 87/574, Canto 98/692, Canto 99/698 悪しき固定金利
- /480 **Guard’s cap quattrocento** Canto 79/485 看守のかぶと
- /480 **o-hon dit que’ke fois au vi’age** [It is sometimes said in the village]
Canto 80/506 武勇なき者に武勇を与えるためにかぶとはある, という村の噂
- /480 **So Salzburg reopens** Canto 79/484 ザルツブルグ音楽祭
- /480 **en casque / de crystal rose les baladines** Canto 80/504
- /483 **perhaps only Dr Williams (Bill Carlos) / ... / ... He wd / have put in the cart**
Canto 79/484 W. C. ウィリアムズ「赤い手押し車」への言及
- /483 **In “The Spring and Autumn” / there / are / no / righteous / wars**
Canto 82/525 『春秋』では義なる戦いはありえない
- Canto 79/486 **in / discourse / what matters is / to get it across e poi basta** [and then nothing else]
Canto 80/494, Canto 88/581 意を伝えたら止めること
- /486 **“in less than a geological epoch”** Canto 81/518, Canto 87/574 通貨改革が理解される
には, 少くとも地質学の一時代が要る
- Canto 80/493 **“Come pan, niño!”** Canto 81/517 耳に残る声「パンを食べな, 坊や」
- /494 **with the wind coming hot off the marsh land / or with death-chill
from the mountains?** Canto 81/517 死の寒風
- /500 *semina motuum* Canto 89/603, Canto 90/606, Canto 105/746 動きの種子
- /505 and there was also Uncle William / labouring a sonnet of Ronsard
Canto 98/686, Canto 102/729 W. B. イエイツのこと
- /507 **As Mabel’s red head was a fine sight** Canto 82/524
- /511 **as a leaf borne in the current** Canto 81/519
- /516 **Si tuit li dolh ehl planh el marrimen** [If all the griefs, and the laments,
and the pain: Henry の死を悼む Bertran de Born の詩より] Canto 84/537
Canto 81/517 And later Bowers wrote: “but such hatred, / I had never conceived such”
Canto 86/565 憎しみ
- /518 **’Ινγξ....’εμὸν ποτί δῶμα τὸν ἄνδρα** [Little wheel...man to my house: 恋人を取り戻そ
うとする女の呪文]

Canto 82/526

/521f this is not vanity / ... / To have gathered from the air a live tradition

Canto 114/792 大気から伝統を集めたことは虚栄ではない

Canto 82/524 Basinio's manuscript with the / greek moulds in the margin Canto 104/740

Canto 83/528 Erigena put greek tags in his excellent verses ネオプラトニスト, エリゲナの詩

Canto 85/546, Canto 87/571, Canto 88/581

一見して智恵と意志に関する詩句が繰り返されていることが分かる。忘れがたい「愛の質だけが問題だ」(76/457, 77/466) という断言や、「おまえの虚栄を引きずりおろせ」(Pull down thy vanity, 81/521) に続く「大気から伝統を集めたことは虚栄ではない」(81/521-522, 114/792) という確信, そしてヴェニスでパウンドが滞在していた家の女中が言った「あまり精を出しなさんな」(76/461, 83/531) という言葉, およびダンテ『俗語論』の「意志の方向」(77/467, 87/572, 576) を別にすれば, 智恵と意志に関する詩句のすべてが孔子と孟子から出ていることが分かるだろう。

孔子からの引用を列挙すると、「物事には始めと終わりがある」(76/462, 77/465) は、『大学』第1章第1節「物有本末, 事有終始, 知所先後則近道矣 (物に本末あり, 事に終始あり, 先後する所を知れば即ち道に近し)」が出典であり, 「どれほど遠いとお思いか?」(77/465, 473, 79/488) は、『論語』巻第五 子罕第九, 三十二節「唐棣之華, 偏其反而, 豈不爾思, 室是遠而, 子曰, 未之思也, 夫何遠之有哉, (唐棣の華, 偏として其れ反せり。豈爾を思わざらんや, 室は遠ければなり。子曰く, 未だこれを思わざるなり。夫れ何の遠きことかこれ有らん)」が出典である。前者は, プロセスに従うとはいかなることか, を教える洞察に満ちた言葉であり, これをパウンドは自らの行動を律する試金石にしているように見える。後者は, 距離を理由にして行動しないのは, 思いが足りないのだ, という意味で『ピサ詩篇』に置かれると理想国家建設への道のりがその気になれば遠くはないか, という意味に変わるだろう。

「一對の符節が合うように」(77/467, 468, 82/526) の出典は『孟子』巻第八 離婁章句下 第一節「孟子曰, 舜生於諸馮, 遷於負夏, 卒於鳴條, 東夷之人也, 文王生於岐周, 卒於畢郢, 西夷之人也, 地之相去也, 千有餘里, 世之相後也, 千有餘歲, 得志行乎中國, 若合符節, 先聖後聖其揆一也, (孟子曰く, 舜は諸馮に生まれ, 負夏に遷り, 鳴條に卒る, 東夷の人なり。文王は岐周に生まれ, 畢郢に卒る, 西夷の人なり。地の相去る, 千有余里, 世の相後る, 千有余歳 [なれども], 志を得て中国に行えるは, 符節を合するが若く, 先聖後聖, 其の揆(軌)は一なり。)」であり, 理想的君主であった舜の志と千年後の文王の志が, 一對の符節が合うようにぴたりと合うことから, 理想的政治家の志が時空を越えて一致し, 結びついていることを表わす美しい比喻となっている。

「『春秋』では義なる戦いはありえない」(78/483, 82/525) は, 出典を『孟子』巻第十四 尽心章句下 第二節「孟子曰, 春秋無義戰 (孟子曰く, 春秋に義戦なし。)」とし, その意味は, 孟子がいわれた。「孔子の書かれたという『春秋』には, 正義になかった戦争というべきものは一つもない。」で, 前述した「あまり精を出しなさんな」(“Non combattere” [Don't fight]) と主題的に結びつく。

「意を伝えたら止めること」(79/486, 80/494, 88/581) は、『論語』巻第八 衛靈公第十五

「子曰、辭達而已矣（子の曰く、辞は達するのみ）」を出典とし、意味は、先生がいわれた、「ことばは[意味を] 伝えるのが第一だね。」である。この箇所のパウンド英訳は“*He said: Problem of style? Get the meaning across then STOP*”¹²⁾であって、孔子の言う言葉の役割がパウンドにあっては文体の問題に変換されていることが見てとれるだろう。

パウンドにとって孔子は政治のモラルを説く人に留まらず、生きる心構えの全体を教える哲人であり、したがって芸術の倫理をも深いところで支える人物なのである。「詩篇第13篇」で孔子の姿はこの上なく美しく描かれていたが、『ピサ詩篇』のパウンドは孔子の理想を自らの理想として、倫理の美を追求し始めるのである¹³⁾。

無論パウンドは、固定金利の悪を非難し(78/480, 87/574, 98/692, 99/698)、必要な通貨改革が理解されないことを嘆きはする(79/486, 81/518, 87/574)。状況はうそ寒く、ムッソリーニを磔にする噂(78/477, 80/497)が想い出されるし、この捕らわれの地へ吹いてくるのは「死の寒風」だ(80/494, 81/517)。だが、それも人の力を超えた「動きの種子」(80/500, 89/603, 90/606, 105/746)ゆえかもしれない。安全な地へ逃れたいとの思いが「サビーニー人ノ土地ヨリローマへ逃レ」(77/473, 78/478)というホラティウスの詩句の引用となって現れ、イエイツの「天国のようなスライゴー」(77/473, 114/793)という言葉にいたく感じ入りもしているようだ。そして「私がひとにかけた憐れみは足りなかった」(76/460, 93/628)と反省するパウンドの脳裏には、「パンを食べな、坊や」(80/493, 81/517)という暖かい言葉が去来しているようである。

しかし、われわれが忘れてはならないのは、何よりもパウンドが詩人だったことである。芸術、それもとりわけ詩への言及が『ピサ詩篇』とそれ以後の「詩篇」の中に散りばめられていることをこの第三のカテゴリー内部で確認しておこう。ザルツブルグ音楽祭への言及に始まって(78/480, 79/484)、W. C. ウィリアムズ「赤い手押し車」(78/483, 79/484)、ロンサールの詩に取り組むイエイツ(80/505, 96/686, 102/729)、若き王ヘンリーの死を悼むベルトラン・ド・ボルンの詩(80/516, 84/537)、ギリシャ語を知らなければ優れたラテン語詩は書けないと喝破したパルマのバシーニオー(82/524, 107/740)、ネオプラトニスト、スコトス・エリゲナの詩(83/528, 85/546, 87/571, 88/581)などへの言及が見えるだろう。

つまり「詩篇第75篇」以降の『ピサ詩篇』は、「詩篇第74篇」で提出された行方定めぬ問題系に対してある種の解答を与えるように書かれていると言えるだろう。問題系とは詰まるどころ、書き手パウンドがどう生きるべきかである。そして、どう生きるかとは、書くことによって何を構築するかに収斂していくだろう。これを確かめるために、われわれはそろそろ『ピサ詩篇』の横糸ではなく、縦糸を辿らなければならない。

だが、その前にパウンドがムッソリーニに何をしていたのかを確認しておく必要がある。第二のカテゴリーで見た「余裕」がパウンドのムッソリーニ像と不即不離の関係にあるはずなのだから。

III. ムッソリーニ讃歌

(1) 仕事について

and the only people who did anything of any interest were H., M.
and

Frobenius der Geheimrat
der im Baluba das Gewitter gemacht hat
and Monsieur Jean wrote a play now and then or the

Possum
(Canto 74/436)

そして興味のある仕事をやったのはH（ヒトラー）とM（ムッソリーニ）と、それに
枢密顧問のフロベニウスだ
「バルーバで彼は風雨をおこした」
それにときどき芝居を書いたコクトーやエリオットだけだ

ナチス・ドイツの^{フェーラー}総統アドルフ・ヒトラーと、ファシスト・イタリアの^{ドゥッチェ}首領ベニト・ムッソリーニ、そしてアフリカを研究したドイツの文化人類学者レオ・フロベニウス、それに詩人・小説家・劇作家・映像作家のジャン・コクトーと詩人T. S. エリオットが「興味のある仕事をやった」数少ない人として、ここに挙げられている。「バルーバで彼は風雨をおこした」は、アフリカの部族がフロベニウスの一行を攻撃しようとした時、嵐が起こり、攻撃を中止したことへの言及であるから、「彼」とはフロベニウスを指す。

だが、ドイツとイタリアの政治家と、ドイツの文化人類学者と、フランスの文人とイギリスに帰化したアメリカ詩人との間にどんな「興味ある」共通項が見出せるのだろうか。パウンド自身の口から回答を聞こう。

1934年、パウンドはイェイツに向かって「今の政治家は多かれ少なかれ屑どもで、違うのは『ムッソリーニと、ヒステリックにムッソリーニの真似をしているあのヒトラーだけだ』と語っている¹⁴⁾。また、イタリア語で書いた「マナー・パンフレット」の中では「ムッソリーニとヒトラーは提案することにほとんど時間を費やさなかった。事を始めるや、イタリア人とドイツ人の徳（virtues）と活動に応じて様々な等級に則って、物品購入券と物品の両方を分配したのだ。」¹⁵⁾と述べている。

そしてローマからアメリカに向けて行った1942年5月26日のラジオ放送ではこう語っている。「諸君が行うまともな行動はすべてムッソリーニとヒトラーへの賛辞になっているのだ。どんな改革も、正しい物価への動きも、市場制御もムッソリーニとヒトラーを称える行為なのだ。諸君が、ローズヴェルトの指導やチャーチルの言葉に従っていると思っても、実は彼らこそが諸君の指導者なのだ。諸君の政府が行うどんな建設的行為もムッソリーニとヒトラーに追随する行為なのだ」と¹⁶⁾。

しかし1943年9月にイタリアが降伏し、1945年5月7日にドイツが無条件降伏した後、パウンドが取り調べ中に語った言葉からは、ムッソリーニとヒトラーを称える激越な調子は消えている。1945年5月8日、パウンドはジェノアで調査官にこう語る。「ラジオ放送で私はファシズムの経済改革に対して好意的に語りました。ムッソリーニは大変人間的だが、不完全な人物で正気を失ったのです。」また「ヒトラーとムッソリーニは孔子に従っている間は成功していたのです。孔子から離れだすと二人とも失敗したのです」と語り、ヒトラーを「ジャンヌ・ダルクのような聖者」に譬え、「殉教者」だとして「多くの殉教者のようにヒトラーは見解が極端でした」と言っている¹⁷⁾。

パウンドが見ていたヒトラーとムッソリーニは何よりも経済改革をおし進める英雄なの

である。そして、レーニンが發明した「書くことと行動の間」にある芸術形態¹⁸⁾をムッソリーニが政治において体現していたとすれば、ムッソリーニは新しいタイプの芸術家だと言える¹⁹⁾。ならばムッソリーニを模倣しているヒトラーも亜流とはいえ新しいタイプの芸術家ということになる。確かに、ティム・レッドマンがヴァルター・ベンヤミンを引いて言うようにファシズムは「政治の美学化」であったかもしれない。また、芸術領域と社会領域を一つのものとするパウンドの思考法は、フロベニウス称揚にも見られるかもしれない²⁰⁾。

フロベニウスについてパウンドは、1940年2月1日エリオットに宛てた手紙の中でこう書いている。「君を啓蒙するために言うのだが、フレイザーは主に文書を使って仕事をした。フロベニウスは物に向かった。口承伝統の中に生き続ける記憶などだ。彼の学生は物を見なければならなかったし、見た物を描くことを要求された。」²¹⁾フロベニウスは目で見た芸術作品から、芸術作品を生み出した社会の文化研究へ進んでいった学者である²²⁾。

パウンドが政治と学問をともに芸術領域と結びつけて理解していたとすれば、ヒトラー、ムッソリーニ、フロベニウス、コクトー、エリオットが並べられても不思議はないかもしれない。それぞれに形は違いつながりながらこれら五人は新しい政治形態、新しい学問方法、新しい芸術を作りつつあったのだから。パウンドが考える彼らの合言葉は「新しくせよ」(Make It New)であったにちがいない。ただし、上記五人を結びつけるのはパウンドの熾烈な観念の力であって、それ以外の何ものでもないことをわれわれは銘記しておかなければならない。そしてこの観念の力によって、現実を見るパウンドの眼が曇らされていることもここで確認しておくべきことである。

(2) その正確な言葉遣い (precise definition) について

“alla” non “della” in il Programma di Verona (Canto 78/478)	「ヴェローナ宣言」でムッソリーニは財産「の」 権利ではなく財産「に対する」権利と書いた (平野訳)
“not a right but a duty” those words still stand uncanceled,	「自由は権利ではなく、義務だ」 こうした言葉は不滅
“Presente!” (Canto 78/479)	「はい、ここに！」 (平野訳)

「ヴェローナ宣言」とは、ナチスドイツの傀儡政権サロ共和国が1943年11月半ばに政治方針を宣言したものであるが、この宣言を起草したムッソリーニの言葉遣いの正確さにパウンドは感銘を受けているのだ。だが、無論言葉遣いだけがパウンドを惹きつけたのではない。サロ政権の新たな基本方針が国家に寄生する富豪階級を撲滅し、労働を経済と国家基盤の主体とするものだった点にパウンドは惹きつけられたのである²³⁾。イタリア人はムッソリーニに対する信頼を失っていたかもしれないが、パウンドはムッソリーニを信じていた²⁴⁾。

「自由は権利ではなく、義務だ」はムッソリーニの言葉であり、ファシストの信条である。パウンドはこの言葉を大いに気に入り自分の便箋に印刷させていたという²⁵⁾。また「はい、ここに」はファシスト特有の点呼への返答で、死者が呼ばれた場合、そこにいる者が

こう答えて同志の死を無駄にしない決意を新たにするのである。

したがってムッソリーニの正確な言葉遣いを称えつつ、パウンドが称えているのは、実は、ファシズムの精神に他ならない。

(3) 政治的能力と人格について

Nenni, Nenni, who will have the succession?	ネンニ、ネンニ、だれが後を継ぐだろうか
To this whiteness, Tseng said	「この白さに——」と孟子は言った
“What shall add to this whiteness?”	「この白さになにが加えられるだろうか」
and as to poor old Benito	あの気の毒なムッソリーニ
one had a safety-pin	一人は安全ピンをもち
one had a bit of string, one had a button	一人はひも切れをもち、もう一人はボタンしかもってなかった
all of them so far beneath him	どいつもみんな彼よりずっと低い才能ばかりだった

(Canto 80/495)

ピエトロ・ネンニは、ムッソリーニに敵対したイタリア社会党のリーダーである。彼は第二次大戦後のフェルッチョ・パルリ内閣で首相になりたがったが、その力量はないとみなされた。大方の意見を自由主義哲学者のクローチェがこう代弁している。「ネンニよ、君は首相にはなれない。その理由は第一に、君はネンニだから、第二に君には行政理念がないから」と²⁶⁾。ならばこの一節はムッソリーニ以後のイタリアを誰が継ぐかという、おそらくはパウンドの皮肉のこもった科白と解されるだろう。

「この白さに…」は『孟子』巻第五 藤文公章句上 四節「他日子夏・子張・子游以有若似聖人、欲以所事孔子事之、強曾子、曾子曰、不可、江漢以濯之、秋陽以暴之、皜皜乎不可尚已」を出典とし、その意味は、「またその後、子夏・子張・子游などが[孔子を慕うあまりに、同じく門人の一人である]有若の容貌や言葉などがいかにも先師によく似ているというので、有若を孔子に見たてて孔子に仕えたように有若に仕えて、せめてもの寂しさを忘れようとして、曾子にもぜひにと同意させようとした。ところが、曾子は『それは宜しくない。先生のご人格は譬えていえば、布を晒すのに揚子江と漢江のあの大量の水で洗いあげ、秋の強い日差しでからりと晒しあげたように、まことに汚れなく真っ白で、これ以上は白さを増し加えることはできぬというほど、とても比類のない徳のすぐれたお方である。[されば有若ごときをもって先生に代えるなどは、とんでもないこと。自分は絶対に反対である]』とあって、きっぱりはねつけた」である。

この挿話は孔子の比類ない徳を白さの比喩で表すとともに、誰も孔子その人に代わることはできないことを強調するものだ。従って、ムッソリーニと孔子の能力と人格が同等に並べられるとともに、同等の能力や人格を持つ後継者がいない点も同じだとされるのである。つまりパウンドはムッソリーニと孔子を重ね合わせようとしているのだ²⁷⁾。

(4) その徳について

Wei, Chi and Pi-kan	微子と箕子と比子
Yin had these three men full of humanitas (manhood)	殷にはこれらの三人の慈悲(徳)に富んだ者たち
or jên ²	つまり仁者がいた

Xaire Alessandro	アレッサンドロ万歳
Xaire Fernando, e il Capo	フェルディナンド万歳, それにムッソリーニ
Pierre, Vidkun,	ピエール, ヴイドクン
Henriot	アンリオットも
(Canto 84/539)	

引用 1-3 行は『論語』巻第九 微子第十八 一節「微子去之, 箕子為之奴, 比干諫而死, 孔子曰, 殷有三仁焉」が出典である。意味は、「殷王朝の末に紂王が凶暴であったため微子は逃げ去り, 箕子は〔狂人のまねをして〕奴隷となり, 比干は諫めて殺された。孔子はいわれた、『殷には三人の仁の人がいた。[しわざは違うけれども, みな国を憂え民を愛する至誠の人であった。]』である。微子は紂の腹違いの兄であり, 微に封ぜられた子爵。周王朝になってからは宋に封ぜられて殷の祖先の祭りをつづけた。箕子は紂の叔父であり, 箕に封ぜられた子爵である。比干は紂に心臓をえぐり取られた。

これら三人の仁者がムッソリーニを始めとし, ムッソリーニと共に処刑されたサロ政権の書記アレッサンドロ・パヴォリーニや, やはりムッソリーニと共に処刑されたサロ政権の文化大臣フェルディナンド・メツァソーマ, そしてナチに協力したヴィシー政府フランスの首相ピエール・ラヴァル, 祖国ノルウェーがナチスドイツに占領されるよう協力し, ドイツ占領下のノルウェー政府首班になったヴィドクン・キスリング, およびドイツ占領下フランスのヴィシー政府で大臣を務め, フランスのレジスタンス組織に射殺されたファシストでジャーナリストのフィリップ・アンリオットといった面々と同列に並べられているのである。

ナチもヴィシー政府もムッソリーニもパウンドの眼には同列に映っているのだ。そしてムッソリーニを中心として, これらの面々が仁者とされている様は, (1)のヒトラーとムッソリーニを優れた人物と見る見方を共有しない限り, 異様にしか映らないだろう。

今日の常識から大きく外れたパウンドの熱烈な, そして無理のあるムッソリーニ讃歌を見たわれわれは, パウンドの眼に映っているムッソリーニが現実のムッソリーニを超えて, パウンドの脳髓の中で孔子の理想にかなう, 芸術家的・理想的君主に変貌している様を目の当たりにしたことになる。そのムッソリーニが「蛆虫ども」の手に掛かって処刑された事実は, パウンドにとって耐えがたいものであったに違いない。『ピサ詩篇』第一歌「詩篇第74篇」が始まるのはまさにこの地点からである。

IV. 二度はりつけにされた者

農夫の曲がった肩にひそむ夢の桁はずれた悲劇——	[1934年ムッソリーニはイタリアの
ああ, マニは日に晒され詰め物をされた	全農民が80年以内に家を持てると
そしてミラノでムッソリーニとクララも	約束した。]
ミラノで踵から吊るされた	[マニ: マニ教の創始者]
死んだ雄牛を蛆虫どもがむさぼるために。	[蛆虫: パルチザン]
ディオニソスは「二度生まれた」が	

二度はりつけにされた者が歴史のどこにいるか
エリオットにこう言ってやれ

メソメソした噺り泣きでなく 勇ましい音だと
ディオケスの都市を築くためには——

その段丘は空の星の色。

ひとを蔑まない落ち着いた穏やかな眼付

雨もまた「道」の一部

離れられるものは「道」ではない

風に白くそよいでいるオリーブの木よ

揚子江と漢江で洗われた

その白さにどんな白さを加えられようか

どんな徳を。 より。本論考Ⅲ(3)参照。]

「偉大は沿岸航海はわれわれの岸边に星々を連れ戻す」

ルシファーが北カロライナ州に沈んだとき

[1944年北カロライナに隕石が降り注いだ]

地の果てを越えて ヘラクレスの柱よりもさらに遠くへ旅立った者よ [ハンノーの沿岸航海]

もしこの穏やかな風が 地中海の熱風に変わったら——

ノー・マン ノー・マン？ オデュッセウスだ

それは私の家族の名だ。 [パウンドの父の名はホーマー]

風もまた「道」の一部

月も姉妹

神をおそれよ、つぎに民衆の無知も

だが正しい言葉を

伝えたのは シジスマンドだ

[武将にして芸術の守護者。パウンドの英雄]

それにドゥッチオとベリーニだけだ またはドラスターヴェレにある [伝統を伝えた
モザイクの「キリストの花嫁」だけが今日まで伝えている / 皇帝の神格化—— 彫刻家と画家]
唐の歴史も知らないような薄ぎたない野蛮人のたわごとなどに騙されるな

(Canto 74 / 冒頭425-426)

ムッソリーニ処刑に対する怒りをあらわにしながら、理想国家建設のためには T. S. エリオットの詩「うつろな人々」(*The Hollow Men*, 1925) 最終行のように「世界は終わる、バーンとではなくメソメソと」(*This is the way the world ends / Not with a bang but a whimper.*) といった力ない諦めの態度ではなく、勇敢な行動こそが必要だ、と詩はまず言う。次いでメディア王ディオケスに倣って理想の都市を建設するには、ワガドゥ神話を範として、心を純化し、孔子の如く真っ白な徳を持たなければならないのだ、と。雨や風を「道」と呼ぶのは、パウンドが、道教の教えを受け入れていることを示唆するだろう。滑走路建設用の鉄板で作った「ゴリラの檻」を襲う雨風に耐えることを、パウンドは自らに進んで課しているのだから。そして、「詩篇第1篇」からオデュッセウスの航海に倣って『キャントーズ』を書いてきたパウンドは、ここではじめて自らを「誰でもない人」ノー・マンと呼ぶのである。

ギリシャ語原語の ΟΥΤΙΣ(ウーティス(無人))は、オデュッセウスが部下の乗組員たちも

るとも一つ目の巨人キュクロプスに捕らえられ、全員がその餌食になる事態に至った時、酒をすすめてキュクロプスを酔わせ、酩酊したキュクロプスに名を問われて、オデュッセウスが騙った名前である。酔ったキュクロプスの目を先のとがったオリーブの木で突いて、全員が洞窟から逃げ出す。洞窟から出たキュクロプスは仲間の巨人に誰がやったのだと問われて「無人がやった（誰にやられたわけでもない）」と答えるくんだり（『オデュッセイア』第9書）はあまりにも有名である。

オデュッセウスは、無人と名乗って首尾よく難を逃れたが、パウンドは無人と名乗っても DTC から逃れられはしないし、ムッソリーニを蘇らせることができる訳でもない。ムッソリーニ処刑と共に理想国家建設の夢が潰えた今、生きる意味が見いだせないオデュッセウス＝パウンドは、ひたすらゼロ人間になろうとしているようである。F. D. ローズベルトを「薄汚い野蠻人」と呼ぶパウンドは²⁸⁾、アメリカ大統領よりもムッソリーニの方を、そして都市建設の英雄シジスマンドやイタリアの芸術家の方を信じているのだ。

しかし、個人の理念をはるかに超える凶暴で巨大な力の存在に、パウンドは気付かないわけにはいかなかったことも確かだ。だが、そういった力にどう抗することが出来るというのか。二度磔にされたムッソリーニ亡き後、ノー・マンとなったオデュッセウス＝パウンドは、二度死ぬ道を選ぶ。これは、自己を一種の「殉教」によって救おうとする実験だったのではないかと私は考える。パウンドの盟友 T. S. エリオットが『聖堂の殺人』(*Murder in the Cathedral*, 1935) で主人公トマス・ベケットに語らせた殉教の定義——殉教とはキリストの誕生と受難を小さな規模で再演することである、従ってそこには殉教者の死の悲嘆と聖者誕生の歓喜が同居する²⁹⁾——に従うなら、ノー・マン＝パウンドの「殉教」はムッソリーニを神の位置に押し上げることになる。『ピサ詩篇』には書いた本人さえ意識していなかったかもしれない深い計算が働いているのだ。

ロナルド・ブッシュは、今検討した原行版『ピサ詩篇』冒頭の10行「農夫の曲がった肩に……その段丘は空の星の色」が、初めは『ピサ詩篇』最終歌「詩篇第84篇」に入れられていた、と報告している。つまりパウンドは『ピサ詩篇』をほとんど書き終えた段階で、「詩篇84篇」を閉じるはずであった憤りに満ちた詩句を『ピサ詩篇』第1歌「詩篇第74篇」冒頭へ移動したのだ、と³⁰⁾。そしてブッシュは「信じがたいことであるが、『ピサ詩篇』の劇的なものは、後から思いついたものなのだ。」³¹⁾と驚きを露にしている。

ブッシュは、テキストの成立過程調査から『ピサ詩篇』の不思議さの一端をわれわれに示してくれているのだが、それはテキストの背後で働く作者パウンドの手の不思議さである。だがわれわれは、したたかなテキスト表層の不思議さに密着して『ピサ詩篇』の論理構造を探っていくことにしよう。われわれの課題は、滅んだ王ムッソリーニなき後の大いなる魂の夜を、書記パウンドがどのように生き抜くかであった。そして、その方法としてパウンドが「殉教」を選んだというところまで明らかになったのである。次にわれわれは、パウンドがどのようにして二度死に、二度蘇るのかを確認しておかなければならない。

V. 死と復活の儀式

i. 第一の死

こびとの朝顔が草の葉に絡まる

バラバと二人の強盗にはさまれた 魂の暗夜

奴隷船のような囚人棟

エドワーズ、ヘンリー・ハドソン 悲惨の友

仲間のカーンズ、グリーン、トム・ウィルソン

それに神の使者のホワイトサイド

看守たちの意見は……について

囚人たちよりずっと低級だ

「ファシストの糞つたれ將軍どもめ」

「デュークの煙草を一袋くれたら」

「おらァー言ったこたァーなんでもやる」

^{アウ・エゴ・イン・ハルム}
われもまた豚小屋にありき

こうしてひとびとはキルケーの豚小屋に横たわった

われ豚小屋にゆきて、魂の屍を見れり

「さあ来い、チビ助」小柄な方がでかい方の黒人に向かって言った

(Canto 74/436)

ひからびたもろい大地はますます埃と化し

草は根もとからすりへっている

もっと暗いのか もっと暗かったのか これが魂の暗夜か

これよりも暗い夜があるのか それともそれは胃弱の十字架の聖ヨハネが

後世に残したものにすぎないのか

つまり、もっと深い場所をまさぐらねばならぬのか それともここがどん底なのか

(Canto 74/438)

ゴルゴダの丘で二人の強盗にはさまれてバラバの代わりに磔にされる男とは、イエスに他ならない（「マタイによる福音書」27章「マルコによる福音書」15章「ルカによる福音書」23章「ヨハネによる福音書」19章）。ならば、キリストと自らを重ねるパウンドは、ここで磔にされて死ななければならぬだろう。

また、既に述べたが、オデュッセウスと自らを重ねるパウンドは、『オデュッセイア』では決してそのような羽目に陥らないのに、オデュッセウスの部下たち同様、キルケーの館ならぬ奴隷船のような囚人棟で自らも豚に変えられ、魂の屍となる運命をも甘受しているように見える。見えるというのは、パウンド＝オデュッセウスも「豚小屋に入って、魂の屍を見た」(ivi in harum ego ac vidi cadaveres animae) とは言っているが、自らが「豚になった」とは言っていないからである。だが、ここはやはりオデュッセウス＝パウンドが魂の死に瀕していると解すべきであろう。なぜなら、肉体が減びても精神は減びず、むしろ神としての本質が輝き出る、復活を約束されたキリストの死より、もう一段階復活の望みの薄い死へ進む方が魂の暗夜にふさわしいからだ。

「魂の暗夜」とはスペインの神秘家^{サン・ファン・ド・ラ・クルス}十字架の聖ヨハネの著作『魂の暗い夜』(The Dark Night of the Soul) への言及である。十字架の聖ヨハネは、自らの欲望を滅却することによって魂を浄化し、神の到来をひたすら待つ状態を「魂の暗い夜」と呼ぶ。だから「魂の暗い

夜」は自らを否定して神をよびこむパラドックスに満ちた「暗夜」であって、輝きの瞬間を準備するものなのだ。

したがって、パウンドがこの第一の死で自らを重ねているキリスト、オデュッセウス、十字架の聖ヨハネは、復活を約束されている人々に他ならない。キリストは自らが神であり、オデュッセウスはアテナ女神を初めとするギリシャの神々に常に守られている。そして十字架の聖ヨハネは、自らが神をよびこむ聖者なのだ。ただ、復活には死が先立たなければならないが、本当に死ぬのはキリストだけであり、オデュッセウスにあっては魂の死が、十字架の聖ヨハネにあっては欲望の死があるばかりである。また、死の徹底度に比例して、三者が救う者の規模も異なる。キリストが全キリスト教徒を救うのに対して、オデュッセウスが救うのは自らと船の乗組員そして故国の妻ペネロペイアと息子テレマコスに留まる。そして十字架の聖ヨハネが救うのは、聖ヨハネその人にすぎない。

だが、ここでわれわれは、パウンドが『ピサ詩篇』以前も以後もキリスト教を是認したことがなかった、という事実を想い出さなければならない。パウンドがオデュッセウスに自らを擬すのは、『キャントーズ』第一歌から一貫した態度なのだが、ここへ来て唐突にパウンドは自らをキリストや十字架の聖ヨハネに擬しているのだ。自らの「殉教」によってムッソリーニを神格化するという転倒した戦略を成立させるために、パウンドはキリストと十字架の聖ヨハネを『ピサ詩篇』内に呼び込んだようにさえ私には思えるのだ。

「聖書」を話題にした囚人たちの会話がしばしば繰り返されるのは（本論考Ⅱ記憶の渦Ⅱの(9)参照）、パウンドが言うように DTC で聞こえる囚人の会話が『ピサ詩篇』の「主要な流れ (main flow) に紛れ込み、割り込んだ」³²⁾からではなく、「殉教者」として自らを定位する必要があったからこそ、パウンドはいくらでもある囚人の会話の中から「聖書」を話題にした会話を選び取って『ピサ詩篇』に書き込んだのだ。パウンド自身の『ピサ詩篇』解説は、原因と結果を逆立ちさせているのである。

こうした転倒は、上の引用箇所にも見られる。重罪犯ばかりが収容されている DTC の「ホワイトサイド」は「神の死者」とされ、「看守たちの意見」は「囚人たちよりずっと低級」で、小柄な黒人が「でかい方の黒人」を「チビ助」呼ばわりする転倒である。豚小屋すなわち囚人棟では価値の転倒が起こっているのだ。そしてパウンドは価値の転倒を表現する囚人たちと連帯しているのである（本論考Ⅱ記憶の渦Ⅱ(15)(16)参照）。繰り返して言うが、パウンド自らの「殉教」によって、ムッソリーニを神格化しようとする転倒した戦略を、情況証拠として支えるように見えるからこそ、囚人たちの会話はテキスト内に運び込まれているのだ。

第一の死には転倒の戦略が隠されている。

ii. 第二の死

「詩篇第八十二篇」

四十年もへて、ライズミュラーは憤がいた [パウンドが通学したベンシル
「なんたることだ デンマークでは百姓だって知っている」 ヴェニア大学のドイツ語教師。
ホイットマンのことだ、あのキャムデンから四マイル離れた 『ホイットマン
エキゾチックでまだうさんくさい彼のことだ とドイツ人』の著者]

ピサのパウンド

「おお 乱れた影よ」

[ホイットマン「たえまなく揺れるゆり

「おお喉よ、 おお高なる心臓よ」
なんと身近にあるのか おお「大地」よ

かご」より]

なにがおまえほど惹きつけるだろうか

おまえのなかに腕をひろげて埋もれ

おまえを抱擁してしまうほどに。おまえは惹きつける

本当におまえには惹きつけるちからがある

知恵はおまえの側にある

素朴に、 比喻をこえて。

私が横たわる場所にはじゃこうそうが生え

それからバシリカも

さまざまな野草とともに四月の豊饒のうちに萌え出でるだろう

フェラーラの近くになんの飾りもなく葬られたあのニッコロ・デステ [シジスムンド・マラテ

それにポー河のこちらと向こうに

タの娘パリジーナと結婚した

吹く風「あの男をもどしてくれ」

フェラーラの領主。妻と息子との

土のなかに胸の骨まで、 左の肩まで埋まっている

不義を知り、 両者の首をはねた。

キップリングはそれが

ミラノ領事となった一月後毒殺

十インチか、 もすこし高いだろうと考えた

され、 遺体はフェラーラに運ば

人間・土 符節の半分ずつだ

れた。遺言により「裸で」埋葬

だが私は誰も知らずにここから去るだろう

された。]

かれらもまた私を知らずに

大地との結婚 「私の夫」と女は言った

クソンス
大地, 神秘

大地の水が私の上に溢れた

大地より出た水のなかに横たわった

それは

動かない大気のしたに横たわっている

大地の神血に酔って

引き潮の

底流のように強い大地の水

だが人間はその深い恐怖の中で生きねばならず、 また実際に生きつづけるのだ

死の孤独が私を訪れた

(午後三時に、 ほんのつかのま)

グクリュオン
涙

(Canto 82/525-527)

ここでパウンドはホイットマンという大地に惹きつけられ、 埋もれて死ぬように見える。レオン・シュレットが「大地」を「半ば擬人化された女神」と見、この個所をパウンドと女神との性的合一と読む³³⁾のは、この死が性交のよろこびを色濃く暗示するからである。この説に強く反対するつもりはないが、四十年前のドイツ語教師を引きあいに出してまで、パウンドが前面に押し出しているホイットマンの影を薄くする必要はないだろう。ホイッ

トマンこそアメリカ詩の母体であり大地なのだから。パウンドはホイットマンを嫌っていたらしいが、1916年には既にホイットマンを盟友とする詩を発表しているほどなのだ³⁴。だから地中に埋もれて、春と共に草木と一緒に萌え出でることを願っている状況は、苦痛よりもむしろ喜ばしさを感じさせる。だが、この豊饒祭式に則った死と復活の儀式は、単なる文学上の「比喩をこえて」(past metaphor)、生きられなければならなかった儀式なのだ。パウンドの詩人としての復活を賭けて。

とはいえ、土の中に「肩の骨まで」埋まった状態から、完全に大地の中に埋まり「大地の^{イコル}神血に酔って」(drunk with 'IXΩP of XΘONIOΣ) いることに危険はない。「符節の半分ずつ」はぴたりと合い、必ずや一人の人間として地上に蘇るからだ(本論考Ⅱ. 記憶の渦Ⅲ. Canto 77の「一對の符節」参照)。しかし、孤独は否めない。「だが私は誰も知らずにここから去るだろう / かれらもまた私を知らずに」に表出される寂寥は、豊饒祭式に詩人としての蘇りを賭けなければならなかった人物の本物の感情をしたたかに伝えるはずだ。そして、この個所の「深い恐怖」はDTCの現在が詩の中へ割り込んだ生の恐怖なのだ³⁵。「午後三時に、ほんのつかのま」訪れた「死の孤独」は、滑走路用の鉄板で出来たゴリラの檻の鋭利な先端がパウンドを一瞬死へ誘った事実への言及に違いない³⁶。「涙」(^{ダクリュオン}δακρῶν) の一語にこめられた自己憐憫と、涙を流す自己を突き放すギリシャ語使用の身振りに、われわれは豊饒祭式という虚構の彼方で揺れる、明日をも知れぬ囚人パウンドの苦境を見るべきであろう。

だが、豊饒祭式は実際にパウンドを救うのだろうか。エレウシスの秘儀が植物の蘇りに基づいて人間が作り出した祭儀だとすれば、復活の契機は何よりも緑の世界にあるはずだ。そして緑の世界に学ぶ人間の創造行為から救いはやってくるに違いない。

iii. 復活の契機

「詩篇第82篇」はピサの収容所から見える中空の風景を描いてこう閉じる。

	ἐντεῶθεν	それゆえに
three solemn half notes		三つのおごそかな半音
their white downy chests black-rimmed		中段の電線に並ぶ
on the middle wire		小鳥たちの黒くふちどられた白い綿毛の胸
periplum		^{ペリプルーム} 沿岸航海
	(Canto 82/527)	

電線に止まる「小鳥たちの黒くふちどられた白い綿毛の胸」が楽譜上の音符のように見える様をパウンドが「三つのおごそかな半音」と記すとき、ピサの空はピサの空のまま芸術作品に変貌している。この個所は2ページ前に出てきた

8th day of September	九月の八日目
f f	ファ ファ
d	レ
g	ソ

ピサのパウンド

write the birds in their treble scale

鳥たちが高い音階で書く

(Canto 82/525:イタリックスは平野)

の変奏を伴った繰り返しである。鳥たちが「歌う」(sing)でなく、「書く」(write)とされていることに注目されたい。鳥の歌声が空に響いて消えるのではなく、書かれて中空に留まるのだ。歌声の音符への変換がここにある。「詩篇第82篇」最終数行は、テキストがこの個所を思い出すかのように書かれ、自らが音符となって電線の楽譜に楽曲を書き記す鳥たちの姿を、聴覚よりも視覚に訴える画像に変換して定着しているのだ。現実の動く風景が芸術作品に変貌してあたかも永遠に静止するようではないか³⁷⁾。パウンドにあっては、自然と芸術世界は連続している。そして、救いは芸術と化したピサの空からやってくるのだ。したがって、「詩篇第82篇」末尾に置かれた一語「沿岸航海」は、自然と芸術が交わる地点へ向けて『ピサ詩篇』が動いていくことを暗示するだろう。ただし、決してまっすぐにではなく³⁸⁾。

だが、端的に救いをもたらすのは緑の世界である。「詩篇第74篇」には「詩篇第43篇」の「草はどこにあってもよいものだ」(grass nowhere out of place)が繰り返されていたし(本論考Ⅱ記憶の渦 I参照)、「詩篇第82篇」の引用個所でも「じゃこうそう」、「バシリカ」、「野草」は称えられていた。そして『ピサ詩篇』の絶唱「おまえが愛したものは残る」で始まる忘れがたいパセッジでは人間の技を超える緑の世界の秩序が思うさま称揚されていた。

What thou lovest well remains

おまえが深く愛するものは残る

The rest is dross

その他は滓だ

.....

(中略)

The ant's centaur in his dragon world.

蟻は自分の竜の世界のケンタウロスだ

Pull down thy vanity, it is not man

おまえの虚栄をひきずりおろせ、人間が勇気をつく

Made courage, or made order, or made grace,

ったのでも、秩序や美をつくったのでもない。

Pull down thy vanity, I say pull down.

おまえの虚栄をひきずりおろせ、おろせと言うのだ

Learn of the green world what can be thy place

秩序のある創造や本当の匠のなかで

In scaled invention or true artistry,

おまえのあるべき位置を みどりの世界に学べ

Pull down thy vanity,

おまえの虚栄をひきずりおろせ

Paquin pull down!

パカンよ、おろすのだ!

The green casque has outdone your elegance.

みどりの小箱は遥かにおまえの優雅を凌いできた。

(Canto 81/520-521)

一見、パリの洋服屋パカンが虚栄に満ちた男として罵倒されているようだが、無論そうではなく、パウンドが罵倒しているのは自分自身である。「勇気」や「秩序」や「美」を何よりも大切だと考えているのはパカンではなくパウンドなのだから。ここでパウンドは自らを増長して「ケンタウロス」だと勘違いした「蟻」に譬え、妄想を剥ぎ取った自己がどれほど卑小かを暴くとともに、「秩序」や「美」を自分の手で作り出せると信じた自己の傲慢さを打擲しているように見える。

こうした激越な自己卑下を経た後に、唯一肯定できるのは確信をもって何かをなした、という一事である。「詩篇第81篇」の結びはこうだ。

To have gathered from the air a live tradition	虚空から生きた伝統を集めたり
or from a fine old eye the unconquered flame	すてきな老人の眼から 不屈の炎を集めたこと
This is not vanity.	それは虚栄ではない。
Here error is all in the not done,	誤りはすべて なにもしないことにある
all in the diffidence that faltered...	ぐらつく自信のなさに……
(Canto 81/522)	(新倉訳を一部変更)

ならば「詩篇第81篇」は、自らの手で「秩序」や「美」を作り出そうとすることは「虚栄」だが、「虚空」に息づく「伝統」を集めることは良いことだ、と言っていることになる。では、「伝統」の息づく「虚空」とはどこなのか？ それは自然と芸術が交わる領域に他ならない。たとえば、「詩篇第82篇」で見た鳥たちが音符となるピサの空がそれだ。そして特にこの「詩篇第81篇」で言えば、人間が詩と交わる領域を指している。「素敵な老人」とはパウンドが尊敬し、勇気を出してその詩人のドアをノックした、ウィリアム・ブラントを指すのだから。

しかし、二度にわたる死から決定的に蘇る手立てはあるのだろうか。「ヨーロッパの廃墟から、壊れた蟻塚から、這い出た、孤独な蟻、わたし、キャンターの書き手」(As a lone ant from a broken ant-hill / from the wreckage of Europe, ego scriptor. Canto 76/458) にできることは何一つない、というのが回答である。

But in the caged panther's eyes: だが檻に入れられた豹の眼には

“Nothing. Nothing that you can do...”	「なにも、なにもおまえには することができない——」
green pool, under green of the jungle,	ジャングルの緑のしたの、緑の水溜り
caged: “Nothing, nothing that you can do.”	檻に入れられて「なにも、なにもおまえにはすることが できない」
(Canto 83/530)	

この最下点から、どのようにしてパウンドは復活するのだろうか？「詩篇第83篇」を辿ろう。

iv. 復活

救いは他ならぬ「緑の世界」からやって来る。まずは水が救いになる。詩は、「知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ」という『論語』卷第三 雍也第六 二十三節の「水」を、ギリシャ語ウードルで表すことによって、孔子とギリシャ文化を結び、さらに平和をラテン語で表すことによってローマ文化とも結ぶ。

in the drenched tent there is quiet	雨に濡れたテントの中は静かで
-------------------------------------	----------------

ピサのパウンド

sered eyes are at rest

ひからびた眼も休んでいる

the rain beat as with colour of feldspar 長石の色をして雨は打ちつづける

blue as the flying fish off Zoagli ツオリの沖ではねあがる飛魚のような青さで

pax, ὕδωρ

ἤΔΩΡ 平和, 水

ウドール
水

the sage

知者は

delighteth in water

水を楽しみ

the humane man has amity with the hills 仁者は山を楽しむ

(Canto 83/529)

(新倉訳を一部変更)

そして、樹皮の下からは、隠れた心の都市ワガドゥがせり上がって来る。

Δρυάς, your eyes are like the clouds over Taishan ^{ドライアード}木の精よ、おまえの眼は「泰山」に

When some of the rain has fallen

かかる雲のようだ

and half remains yet to fall

いくらか雨が降ったあと

まだ降りそうなあの雲のようだ

The roots go down to the river's edge

根は川辺に降りていき

and the hidden city moves upward

隠れた町が上に向かって動いてくる

white ivory under the bark

樹皮の下の白い象牙

(Canto 83/530)

パウンドはDTCから見えるピサの山を中国の霊山「泰山」に見立ててきたのだが、「泰山」はここに至るとニューハンプシャーのチャコーラワと等しくされ (With clouds over Taishan-Chocorua), アメリカと中国も結び付けられる。次の引用では、山のふもとが光の水で満たされ、ネオプラトニズムの「光」の中に仁者の愛する山が浮かんでいる、というエクスタティックなヴィジョンが提示され、このヴィジョンの中で西欧と中国が結びつく。

Plura diafana

さらに透きとおった光りのかずかず

Heliads lift the mist from the young willows ^{ヘリアデス}日の娘たちは若い柳から霧をはらう

there is no base seen under Taishan

泰山にはふもとがなく

but the brightness of 'odor ὕδωρ ^{ウドール}あるのはただ水のきらめきのみ 水

the poplar tips float in brightness

ポプラの枝先もきらめきのなかに漂い

only the stockade posts stand

囲いの柵だけが突っ立っている

(Canto 83/530-531)

(新倉訳を一部変更)

こうした圧倒的なヴィジョンの中で大気と大地と木がそっくり神話次元に移行した後では、「なにひとつできない」と思い知った地下のパウンドを訪れる「緑の世界」からの使者スズメバチの幼児が、救い主に見えても不思議はない。

仲間のすずめばちが整然とした家を建てている

ずんぐりしたインディアンのびんの型をした四部屋の家
すずめばち（「ラ・ヴェスパ」）、泥、つばめの方式
……………（中略）……………

膚寒い日の出のあとのあたたかさのなかを
新芽のような緑の幼児が
ひとり母親ばちのびんから
頭か先端を突きだした

ジョーンズの齧歯動物たちにもめげず
はっかがふたたび芽生える
このゴリラの檻のわきにも
四葉のついたクローバーが生えたように

一枚の葉にも心が揺らぐとき
一匹の蟻の前肢がおまえを救ってくれる
クローバーの葉はその花と同じ香や味がする

あの幼児は降りていった
テントの屋根の泥から^{テレス}大地へと
自分と同じ色をした葉のあいだをわけて
^{クリス}地下に住むひとびとに告げにいったのだ
大地へ われわれのニュースを知らせるために
大地へ 地下に住むひとびとに
大気から生まれ
コーレの ペルセポネーの
あずまやで歌をうたい
ターバイのひと、ティレシアースと言葉を交わすのだ

^{クリスト・レ} ^{ディオ・ソレ}
(主キリスト、太陽神)

わずか半日ほどで自分の住家を作り上げた
(ラ・ヴェスパ) かわいい泥のびん

その日はもう書くことをしなかった

墓のように深い疲労がある。

(Canto 83/532-533)

引用冒頭のスズメバチの「家」は、「おまえの虚栄をひきずりおろせ」パセッジ（「詩篇第82篇」末尾）に出てきた「みどりの小箱」の正体である。つまりスズメバチが家をつく

り子を産み、育てる営みこそが「秩序のある創造」であり「本当の匠」なのであって、パカンをはじめとする物を作る人はそれをこそ学ぶべきだ、とされていたのである。こうした営みを一語で表したものが「みどりの世界」なのだ。無論そこには春とともに芽ぐみ、花を咲かせ、実をつけ、枯れ、再び春とともに芽ぐむ植物の「誕生-開花-結実-死-誕生」のサイクルも含まれている。したがって引用5行目の「新芽のようなみどりの幼児」(an infant, green as new grass)は、植物界と昆虫界の代表なのだ。

悪条件にも屈することなく「はっか」や「クローバー」が春に再び芽生える時、「大気から生まれた」(begotten of air)スズメバチが、冥界を訪れ、春に蘇るべく地中で冥府の王ハーデスと暮らしているペルセポネー(デーメーテールの娘)の館で「歌を歌い」(that shall sing in the bower / of Kore, *Περσεφόνη*)、冥府にあってもなお全き心を失わなかったティレシアース(『オデュッセイア』第10書, 493行)と「言葉を交わす」と詩は言う。これはスズメバチの幼児による地獄の征服に他ならない。

しかしこの箇所は少々こみいっている。というのは、われわれはこれまでパウンド=オデュッセウスが「大地と結婚」(connubium terrae, 82/526)し、大地の水におおわれて死に、蘇りを待っていると解してきたのだが、ここではパウンド=オデュッセウスは既に地上にいるように書かれているからだ。「ゴリラの檻」はパウンドを閉じこめていた「死の牢獄」であり、またスズメバチの幼児が「大地へと」^{テルス}下降する前にいた場所は、『ピサ詩篇』を書く現在のパウンドの医療「テントの屋根の泥」の中なのだ。「ゴリラの檻」と「テント」が地上にあるDTCの建物であることは言うまでもない。そしてスズメバチの幼児が「地下に住むひとびと」(to them that dwell under the earth)に告げるのは、地上にいる「われわれのニュース」(our news)なのである。一体、いつの間にパウンド=オデュッセウスは死から蘇ったのか？

詩テキストで構築してきた死と復活の主題が、復活の瞬間を提示しないまま放置され、詩の中では死んだまま地下に横たわっているはずのパウンド=オデュッセウスに代わって、地上にいる現実のパウンドの姿が、何の説明もなく詩中に提示されているのである。

第二の死に関してレオン・シュレットはこう言う。「ここでは、天国への入場は死によってのみ達せられ、それが男と大地の性的結合で示されている。(中略)パウンドがピサで体験しているのは死にも等しい絶望だが、オデュッセウスやダンテ同様、死ぬことなく死を体験しているのだ」と³⁹⁾。

確かにその通りだ。死んでいない者に復活の必要はないから、復活の瞬間がテキストに書かれていないのは当然である。しかし、それなら復活の欲びもないはずだ。シュレットの解釈は前半部にこそ意味がある、と解さなければならない。すなわち、「性的欲びの絶頂」と「天国体験」と「死」が一つのものである、という見解である。そして、この性交のパラドックスにこそ植物の豊饒神話を超えたエレウシスの秘儀の核心がある⁴⁰⁾。ならば、われわれはこう考えなければならない。第二の死そのものの中に大地と交わる性の欲びと天国体験があったのだ、と。復活の瞬間は書かれなかったのではなく、神秘の中で乗り越えられていたのだ。

さて、われわれのスズメバチに戻ろう。「大地」へ降りて行き、「ティレシアースと言葉を交わす」スズメバチの幼児は、オデュッセウスと重なるのである。キルケーの保護を受けて冥府くだりをするのも(『オデュッセイア』第10書)、ティレシアースと語るのもオ

デュッセウスだからだ（『オデュッセイア』第11書）。つまりスズメバチの幼児は地下に横たわって死んでいるオデュッセウス＝パウンドを救うために地獄の征服をするのではなく、「スズメバチの幼児」と化したオデュッセウス＝パウンドが冥府にいる死者たちに、蘇った自らの「ニュースを知らせ」、死者たちを救うのだ。歓びに満ちた豊饒祭式は、自己の蘇りに留まらず、他者の蘇りをも促すことによって初めて完成するのである。

「主キリスト」が、本来はなじまぬはずの「太陽神」アポロとともに括弧の中でつつましくやすらっている様を見るがよい。一神教と多神教の違いを超えた大いなる調和の世界が、ひそやかに暗示されていることが見てとれよう。ここにいる「書き手」は、「みどりの世界」の教えを学び取ったパウンド＝オデュッセウスに他ならない。豊饒神話の完成は、その根底でムッソリーニを支持した自己の乗り越えを含んでいたのである。したがって自らが「殉教者」となることで、ムッソリーニを神格化するという無理な転倒は、すでに不要となっている。「秩序のある創造」や「本当の匠」は、人間の業ではなく、「みどりの世界」にこそあることを、パウンドはピサで身をもって学んだのだ。

恋に落ちたパオロとフランチェスカがその日はもう読むことをしなかったように（ダンテ『地獄篇』第5歌）、自己心内の地獄を征服した後、私＝パウンドが「その日はもう書くことをしなかった」のは、当然であろう。「墓のように深い疲労」は何事かを達成した後の疲労であって、決してネガティブなものではなく、意味深い疲労なのである。歓喜に満ちた豊饒祭式がピサで完成したのだから。

VI. 天上のヴィジョンと地上の肉体

しかし、こうした熾烈なヴィジョンの後に残るのは、地上にいるパウンドの老いた肉体である。最後に引用したエクスタティックな詩の後には、かつてイエイツが「ピーコック」の詩を書いたことを思い出すいささか弛緩した詩行が続き、「詩篇第83篇」は「ああ、老人はもう休ませてくれ」（Oh let an old man rest.）で閉じるのだ。無論、弛緩したかに見える詩行には意味がある。エクスタティックなヴィジョンは、人間が物を作る営みによって支えられなければならないからだ。しかし、それは疲れる作業ではある。「休ませてくれ」と言いたくなるのも無理はない。『ピサ詩篇』執筆は、ギリシャ・ローマ神話の美と孔子の倫理の美とを融合させ、その融合空間にDTCから見えるピサの風景を中国の霊山「泰山」と二重焼きにして浮かび上がらせるとともに、初めに要請された「殉教」によるムッソリーニ神格化という転倒した論理を「みどりの世界」のより大いなる論理によって乗り越える作業だったからである。

『ピサ詩篇』最終「詩篇第84篇」でパウンドはピサの空を見上げながら「この美しさのすべてから何かか生まれるはずだ」（out of all this beauty something must come）と断言するが、ピサの空へ投射したヴィジョンは、いまだ明確な像を結んではいない。したがって地上にいるパウンドの肉体はついに救われはしない。しかし、『ピサ詩篇』でパウンドは熾烈な美と感動に向けて高揚していく詩行と、詩作という日々の営みを描く弛緩するかに見える詩行の双方をテキストとすることによって、生の律動をそのままに定着する「開かれた詩」を創出することが出来たとも言える。

『ピサ詩篇』は夜が明けたことを感謝して閉じられるが、ムッソリーニ処刑の打撃を「み

どりの世界」の論理によって乗り越えたパウンドは、天上のヴィジョンを地上に定着させることによって、地上の肉体を天上へ押し上げるために渾身の努力を続けなければならないだろう。それが『鑿岩機詩篇』『玉座詩篇』『草稿と断片』の要諦に他ならないが、いまはわれわれはパウンドとともに、魂の暗夜を抜け出たことを寿いでおこう。

If the hoar frost grip thy tent

Thou wilt give thanks when night is spent. (Canto 84/540)

霜が白くテントに凍りつく日には

夜が過ぎるとき おまえは感謝の祈りをささげるだろう。

- * 本稿は2000年10月28日名古屋大学において開催された日本エズラ・パウンド協会第22回大会のシンポジウム「後期の『詩篇』を読む」で「『ピサ詩篇』——記憶の渦——」のタイトルのもとに行った発表に基づいている。

注

テキストは Ezra Pound, *The Cantos of Ezra Pound* (London: Faber and Faber, 1975) を用いた。孔子と孟子のテキストについては、『論語』(金谷治訳注, 岩波文庫, 1999年)『孟子』上(小林勝人訳注, 岩波文庫, 1968年)『孟子』下(小林勝人訳注, 岩波文庫, 1972年)に則っている。また, *The Cantos* 内の語句および事項に関しては, Carroll F. Terrell, *A Companion to the Cantos of Ezra Pound Vol. I & II* (Berkeley: University of California Press, 1980, 1984) に依拠している。

- 1) 木村裕主『ムッソリーニ——ファシズム序説』清水書院, 1996, 185-6.
ポール・ギショネ『ムッソリーニとファシズム』白水社, 1974, 152.
新倉俊一訳『エズラ・パウンド詩集』角川書店, 1976, 438-41.
城戸朱理訳編『パウンド詩集』思潮社, 1998, 158-160.
Humphrey Carpenter, *A Serious Character: The Life of Ezra Pound* (London: Faber and Faber, 1988) 619-620, 657-664.
Peter Ackroyd, *Ezra Pound* (London: Thames and Hudson, 1980), 85-91.
を参考にして作成した。
- 2) 榎澤厚生「*The Cantos* の Internal Quotation」『大阪大学教養部研究集録(外国語・外国文学)』第22輯(昭和49年3月) 101-122。
- 3) 新倉俊一訳『エズラ・パウンド詩集』(角川書店, 1976年)。ただし, 城戸朱理編『パウンド詩集』(思潮社, 1998年)に掲載されている新倉俊一氏の新訳も参考になっている。
- 4) Barton Hatlen, "Ezra Pound and Fascism" in Marianne Korn ed., *Ezra Pound and History* (Orono, Maine: The National Poetry Foundation, University of Maine, 1985) 145-172 参照。
- 5) 正名(物の正しい名)に収斂するこれらの理念の対極をなすが、「物を本質からずらして用いる」という意味での USURA であることを, シンポジウムの際, 司会・講師をつとめた長畑明利氏(名古屋大学)の『玉座詩篇』発表から教えられた。
- 6) 私がこうした「余裕」の根拠をパウンドのムッソリーニ支持が揺らがなかった点に求めたことに対してフロアの岩原康夫氏(工学院大学)から, ピサのパウンドに余裕があったはずはなく, 並外れた詩的才能があったから詩があふれ出てきたのであって, それは「余裕」とは言えないとの反論があった。また, パウンドはピサで揺れていた, そうでなければ「おまえの虚栄を引きずり下ろせ」などというパセッジが出てくるはずはない, と。至当な見解である。確か

にパウンドは揺れに揺れながら、自らの半生を振り返り、何を支えに一日一日を生き延びるかを考え抜いただろうし、氏が指摘するように『ピサ詩篇』を書いたからこそ生きていられたと思う。ただし、氏の論と私の論とは究極的には矛盾するものではなく、同じ事態の表を見るか裏を見るか表層を見るか深層を見るかの違いだと私は考える。

- 7) エドワーズの「バルーバ族の顔付き」は、「バルーバで嵐を起こした」学者フロベニウスのエピソード（流入する詩句カテゴリー I に挙げた詩篇第38篇/196頁参照）とつながり、バルーバ族のアフリカ人＝エドワーズ、フロベニウス＝パウンドの類比をも形成する。
- 8) 「話す人」から「書く人」への転換については、榎澤厚生「失意の詩人ウーティス——『ピサ詩章』のパウンド」、榎澤厚生『〈無人〉の誕生』(影書房, 1989年) 207-224所収、に多くを教えられた。特に220-221ページ参照。
- 9) Hugh Kenner, *The Pound Era* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1971), 473に「三月」の写真が載っている。
- 10) 「正確な定義」に近いジョークを挙げる。

Canto 77/469 So Miscio sat in the dark lacking the gasometer penny
but then said: "you speak German?"

to Asquith, in 1914

"How Ainley face work all the time
back of that mask"
But Mrs Tinkey never believed he wanted her cat
for mouse-chasing
and not for oriental cuisine

"Jap'nese dance all time overcoat" he remarked
with perfect precision

それで道郎は、ガスを使うための小銭にも事欠いて暗闇の中に坐っていた
が、こう尋ねた「あなたはドイツ語が話せますか？」

とアスキスに、1914年のことだ

「エインリの顔があのかのマスクの背後でどれほど

ひっきりなしに動いていることか

しかし、ティンケイ夫人は道郎が彼女の猫を欲しがるのは

鼠を捕まえるためとは思わなかったし

東洋料理のためだとも思わなかった

「日本人はいつもオーバーコートを着て踊ります」と道郎は指摘した

この上なく正確に (平野訳)

- 11) 「美しい乳房」の主題は、光を生む「性交」や「豊饒」の主題と結びつく。(Canto 77/470)

bel seno *Δημίτηρ* copulatrix 美しい乳房 デーメーター 性交する者

thy furrow おまへの耕した跡は (平野訳)

「猫のラドロのよあそび」も「性交」と「豊饒」を寿ぐ行為であるため、「天国」とされている。

- 12) Ezra Pound, *Confucius: The Unwobbling Pivot, The Great Digest, The Analects* (New York: New Directions, 1969), 269.

- 13) Floryは『ピサ詩篇』からパウンドは、オデュッセウスの行方定まらぬ航海ではなく、孔子の理想とする秩序ある国家に傾倒していく、と言う。Wendy Stallard Flory, *Ezra Pound and The*

- Cantos: A Record of Struggle* (New Haven: Yale University Press, 1980), 184–185.
- 14) Charles Norman, *Ezra Pound: a biography* (London: Macdonald, 1969), 321.
 - 15) Norman, 378.
 - 16) Norman, 394.
 - 17) Norman, 396. 殉教者云々のところは Interview by Edd Johnson, *Philadelphia Record-Chicago Sun*, May 9, 1945 と注がついている。
 - 18) Ezra Pound, “Bureaucracy the Flail of Jehovah” published in *The Exile*, Autumn, 1928; included in Ezra Pound, *Selected Prose 1909–1965* (London: Faber and Faber, 1973), 187.
 - 19) Tim Redman, *Ezra Pound and Italian Fascism* (Cambridge: Cambridge University Press, 1991), 119.
 - 20) Redman, 118.
 - 21) D. D. Paige ed., *The Selected Letters of Ezra Pound 1907–1941* (New York: New Directions, 1971), 336.
 - 22) Tim Redman, *Ezra Pound and Italian Fascism*, 119.
 - 23) Redman, 235.
 - 24) Redman, 235.
 - 25) Carroll F. Terrell, *A Companion to the Cantos of Ezra Pound, Vol. II* (Berkeley: University of California Press, 1984), 417.
 - 26) Terrell, 432 より。
 - 27) Hatlen はパウンドの *Jefferson and/or Mussolini* に関してこう言う。
[If] Pound is to bring Jefferson and Mussolini (and Confucius) into relationship at all, he can do so only by simply conflating them, so that they become, in a way that deliberately subverts conventional “reason,” *the same person*.
Burton Hatlen, “Ezra Pound and Fascism” in Marianne Korn ed., *Ezra Pound and History* (Orono, Maine: National Poetry Foundation, 1985), 161.
 - 28) Carroll F. Terrell, *A Companion to the Cantos of Ezra Pound. Volume II*. (Berkeley: University of California Press, 1984), 363.
 - 29) T. S. Eliot, *Murder in the Cathedral* in T. S. Eliot, *Collected Plays* (London: Faber and Faber, 1962), 33.
“Is it an accident, do you think, that the day of the first martyr follows immediately the day of the Birth of Christ? By no means. Just as we rejoice and mourn at once, in the Birth and in the Passion of Our Lord; so also, in a smaller figure, we both rejoice and mourn in the death of martyrs. We mourn, for the sins of the world that has martyred them; we rejoice, that another soul is numbered among the Saints in Heaven, for the glory of God and for the salvation of men.”
 - 30) Ronald Bush, “Late Cantos LXXII–CXVII” in Ira B. Nadel ed., *The Cambridge Companion to Ezra Pound* (Cambridge, UK: Cambridge University Press, 1999), 117.
 - 31) Bush, 117.
 - 32) Peter Ackroyd, *Ezra Pound*, 88 にパウンド自身の『ピサ詩篇』解説が挙げてある。
The form of the poem and the main progress is conditioned by its own inner shape, but the life of the DTC passing OUTSIDE the scheme cannot but impinge, or break into the main flow.
 - 33) Leon Surette, *A Light from Eleusis: A Study of Ezra Pound’s Cantos* (Oxford: Oxford University Press, 1979), 213.
 - 34)

<p>A Pact</p> <p>I make a pact with you, Walt Whitman— I have detested you long enough. I come to you as a grown child</p>	<p style="text-align: center;">盟約</p> <p>長いあいだ嫌ってきたが、ウォルト・ホイットマンよ おまえと盟約を結ぼう。 おまえをたずねて行こう 頑固な親父の</p>
--	--

Who has had a pig-headed father;	もとで育った大きなこどものおれだが、
I am old enough now to make friends.	いまや友好関係を結べるほどの年齢に達した。
It was you that broke the new wood,	新しい森を切り開いたのはおまえ
Now is a time for carving.	今は彫琢する時。
We have one sap and one root—	おれたちの根と樹液はひとつ
Let there be commerce between us.	さあ、交わろうではないか。

(*Lustra*, 1916所収)

(平野訳)

35) Floryはこの個所に「狂気に陥る恐怖」を見ている。Wendy Stallard Flory, *Ezra Pound and The Cantos*, 221.

36) Humphrey Carpenter, *A Serious Character: The Life of Ezra Pound*, 662.

37) 『キャントーズ』テキストの「運動」と「静止」については、まったく違う文脈ながら、1998年4月19日名古屋大学で開催された日本アメリカ文学会中部支部大会において、「詩と映像」というタイトル下に行われたシンポジウムで司会・講師をつとめた岩田和男氏（愛知学院大学）が、映像作家スタン・ブラッケージの『夜の期待』と『キャントーズ』テキストを比較し、「動きの止まる瞬間の美学」を指摘した発表に示唆を得ている。

38) 以下の一節が『ピサ詩篇』の詩法を語っていると考えられる。

By no means an orderly Dantescan rising / but as the winds veer / tira libeccio / now Genji at Suma , tira libeccio / as the winds veer and the raft is driven / and the voices , Tiro, Alceme / with you is Europa nec casta Pasiphaë / Eurus, Apeliota as the winds veer in periplum (Canto 74/443)「決して 秩序のあるダンテ風の上昇ではなく / 風のまにまに / 南西の風が吹き / 須磨の源氏, 南西の風が吹き / 風のまにまに筏は操られ / さまざまな声, チュローやアルクメーネ / そばにいるのはエウローペーだ, かの貞節なパーシパエーではない / 南東の風 東風 岸をめぐって吹く風のまにまに / 「私は月よ」 あればクニツアだ / 岸をめぐって吹く風のまにまに」

39) Leon Surette, *A Light from Eleusis*, 214.

40) Surette, 214-215.

The ‘connubium terrae’ vision is Eleusinian in inspiration if not in detail. For Pound, the central rite of Eleusis ‘is the coition and *not* the going to a fat-buttocked priest’. He incorporates this view of the matter in the *Pisan Cantos*, but so cryptically as to have puzzled even the astute editors of the *Annotated Index*. It is contained in two widely separated Greek lines: *KOPH, 'AΓΓΑΟΣ 'ΑΛΑΟΥ* (74/442:470), and *ἀγλαός ἀλάου πόρνη Περβεφόνηια* (80/494 : 527). The *Index* translates *alaou* as ‘blind man’, and perceives a reference to Tiresias. However, *alaou* can also be translated as ‘darkness’, and I believe this to be the correct translation. The two passages would thus read, respectively, ‘Kore [,] the shining of the dark’, and ‘the shining of the dark [,] whore [,] Persephone’. The word, *porne*, translates as ‘whore’, but does not, of course, necessarily imply the *selling* of sexual favours. Koré (daughter) is the Eleusinian name of Persephone. She is *porne* because she is the primal bed-mate, without benefit of clergy. She is ‘of the dark’ because she dwells in the Underworld. She is ‘shining’ because her annual return to earth from the Underworld is celebrated at Eleusis by the showing forth of a bright light amid the darkness of the Telesterion. (Her return is annual, but the festival was celebrated only every fourth year.) This light or brightness is identified with the act of coition in canto 36: ‘Sacrum, sacrum, inluminatio coitu’ (‘A sacred thing, a sacred thing, the illumination of coition’).